
邪神の加護を受けし物

くるみい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

邪神の加護を受けし物

【Nコード】

N1285Y

【作者名】

くるみ

【あらすじ】

いきなり不幸になった少年がいた、世界に疎まれた少年がいた、世界に棄てられた少年がいた、別のところで流行の「異世界落とし」で人間観察をしようとしていた邪神がいた、邪神が少年を面白そうだと拾った、しかし、拾った少年は変わって性格で二人の距離は次第に縮み、そして、二人は遠い昔に求めることをやめ、傷の舐め合いだと笑っていた「友情」という「絆」を手に入れた、この物語は心がすさんでしまった少年と時々遊びにくる邪神の物が「なにシリアスっぽくしてんだ馬鹿作者」「やはりただのバカか」ちょw今

あらすじだ！お前等！「いや、これコメディだろ？」「いやバトル
コメディらしいの」いや、恋愛も入れるけどな「な・・・なん・・・
だど！？！？」「！？お主・・・死ぬ気か！？」お前等削除するぞ
！「お前の夢が壊れるだけだぜ」う”「やはりバカか」

ご挨拶及び小説説明（前書き）

この小説の詳細とご挨拶

ご挨拶及び小説説明

どうも、くるみいというものです。

他の作者の方々の小説を見て、書きたいと思って文才もなく文法なにそれwおいしいの？

という状態の私が小説を書きます。

さて、この小説についてですが、できる限り独自で考えていますが、やはりくるみの能力では厳しいイベントや、恋愛方面の運び方などは他の作者の作品を参考にする場合があります（もちろん許可は取ってからです）そしてこの転生最強チートオリ主のヒロインはちうたん、茶々丸、アキラ（崩壊）あたりで逝こうかと思っていますが、読者様方にアンケートをとって追加する！ということもあると思います。

ですが！！このちゃん、せっちゃん！この二人を選択する貴方！気をつけて、作者の能力じゃ再現できないかもです。主に口調。それでもいいという方はアンケートどうも、くるみいというものです。他の作者の方々の小説を見て、書きたいと思って文才もなく文法なにそれwおいしいの？

という状態の私が小説を書きます。

あとこの小説の書き方ですが、オリ主視点で地文も主人公寄りになっています。

世界観や登場人物の考え方が違う！！！！といわれる前に言いますが、思いつきり独自設定入ってます、それはもうコレでもかというくらいに突っ込んでますよ。ええ。突っ込んでます。突っ込んでますよ！ゲフンゲフン・・・詳細はお話の中と設定説明で書いておきます。能力に関しては第2話あたりで説明があるのでそちらでご確認を。

次に投稿関係ですが、2日に1話くらい、「妄想がWとWまWんW
ねWえW W W」とか気持ち悪いことになったら連続投稿します。

ご挨拶及び小説説明（後書き）

どうも、この小説を閲覧していただきありがとうございます。

さて、いきなりですがアンケートします！！ヒロインです！アンケートです！ワーワーパフパフモミモミ！

ヒロインは学園生徒でお願いします。とーこ先生は好きなのですが使い辛く、作者の能力では無理ということが判明したので除外させていただきます＞＜

あ、でも、上位食い込んでたら書きます。書くしか・・・ないじゃないか！

出会い（前書き）

少年が棄てられ、邪神と出会います

出会い

side 少年

「暗い・・・どこだここ・・・確か家でゲームしてたはずなんだけどな・・・」

気がついたら真っ暗な空間に居た、自分がそこに存在しているかもわからないほどの闇、訳のわからない不安が押し寄せくるような闇。

「これは・・・夢・・・じゃない・・・なんで！？俺がなにかしたかよ！！！」

夢だと逃げたかったが本能がわかっていた――コレハ夢ジャナイ

そこで俺の意識は一旦なくなった。

side 邪神

「やべー・・・超暇・・・」

私こと邪神はとても暇である。俺は力が強すぎるので回りに誰もよってこない、天界の討伐だの何だのほざくバカ共か、俺に罪を償って正しい神になれるとか言うあの慈悲女しか俺のところに来ない。

来たとしても100年に1回程度

「あー、なんか面白いことないか・・・探すか」

そうと決まれば情報収集！力任せにアカシックレコードをこじ開ける

「なんか糞屑ゴミの神共の間で”異世界落とし”が流行ってるらしいな・・・」

ふむ、あのゴミ共にしては良い遊びを考えたもんだ！これで人間観察でもするか

「そうと決まれば人材を・・・ん？」

アカシックレコードを閉じようとしたら誰かが世界から追放されたようだ

「は？世界から追放されるって何やったんだよ・・・まあこいつ面白そうだ・・・こいつにするかw」

side out

side 京夜

俺こと京夜は中学3年生8月までは普通な不幸の生活を送っていた。

だがある日から異常な不幸に見舞われた、といっても、昔から不幸だったが、親が死んで、遺産目当ての親族、遺産目当てのクラスメートの女、前々から不幸だったがレベルが違うことが起き始めた、痴漢疑惑だったり、ぼーかろいど○音のカゲ○ウデ○ズがビツクリを起こすような・・・例を挙げると、トラック突っ込んできたり、

鉄柱落ちてきたり、AK乱射してる薬中に追い掛け回されたり、変なお前はでてけとかいう変な夢を見たり、とにかく2ヶ月間不幸の連発だった。

そしてなんでいきなりこんなこと話してるかというところでもしないと頭がおかし「おい！・・・聞こえたら返事をしてくれんか」

「・・・ん？」

side out

side 邪神

「おい！（あぶね、元の口調で言うところだった）聞こえたら返事してくれんか」

「・・・ん？」

（お・・・パスが通った、引き上げるか）

side out

side 京夜

え？は？え？は？何が起こった

「ふむ、困惑してるところ悪いがの、聞いてくれんか」

（誰だこいつ・・・ああ・・・神様ってやつか・・・プライバシーは守ってくれてるのかな？）

「どうした？いつまで放心しておる

」

（ふむ心は読んでないみたいだな。あまり返事しないと読まれるかもしれない）

——邪神は心を操れるので読む必要がないので覚えていないから読めませんww——

（なにか受信した気が）

「あの、貴方は神様で間違ってますよね？」

「うむ、間違いないぞ」

（やっぱりか）

「私を地球に戻してください早く今すぐ！ASAP！（できるだけ早く）」

「あー・・・それが・・・のう・・・」

（ん？なんか違和感が・・・）

「お主を間違えてあの世界から隔離してもうた！すまんのw」

「・・・は？・・・というと？」

「うむ。もうあの世界には戻れん、だが他の世界に転生させてやる。もちろんその世界ですぐ死なないように能力もつけてやるぞい」

（・・・おかしい・・・だったらあの空間は？そのこの人是何か変な感じが・・・そうなにか・・・嘘を・・・嘘？・・・ああ・・・もうヤケだ・・・カマかけよ・・・）

「あんたさ・・・もうわかってるぜ・・・バレてるバレてる、もう遊びはやめようぜ？」

「ッ！なんのことじゃ？」

「あんたが隠してることだよ」

（この言い方だったら、慌てていたら、人格、性格、しゃべり方、事情、全部の嘘に対応できる・・・）

side out

side 邪神

（あーだりー、さっさと観察してーな、能力適当だいいよなーなにがいいか・・・）

「うむ。もうあの世界には戻れん、だが他の世界に転生させてやる。もちろんその世界ですぐ死なないように能力もつけてやるぞい」

「あんたさ・・・もうわかってるぜ・・・バレてるバレてる、もう

遊びはやめようぜ？」

（なっ！？なにが・・・カマか・・・！？慌てるな・・・慌てたら俺の人間観察ができなくなる・・・）

「ッ！なんのことじゃ？」

「あんたが隠してるってことだよ」

（こいつ・・・）

「ハア・・・めんどくせーな・・・せつかく面白そうだったのによ・・・」

Side out

Side 邪神

「ハア・・・めんどくせーな・・・せつかく面白そうだったのによ・・・」

（きた！かかったか・・・）

「くくっ・・・ただのカマだったのにな・・・」

「あ”あ”！？カマあ！？・・・ハア・・・なさけねえ・・・」

「あー・・・あんた邪神かなんかか？」

「ツツ！ああ、そうだけどなにか？」

（切れてるな・・・まあカマに引っかけたらこうなるか・・・）

「なんで俺を隔離した？」

「ちがーよお前は世界に棄てられたんだ」

「は？」

「お前が何かしたんじゃないか？」

（・・・あの変な夢か！あれは世界だったのか・・・！？つかんだよ”棄てた”って！俺が何かしたのかよ！俺はただ・・・）

「！？おい！小僧！おい！落ち着け！」

「あ・・・？え？」

「・・・お前の棄てられた理由が今わかったよ」

「なに！？教えてくれ！なにが！？！？」

「お前は・・・器がでかすぎるんだよ」

「器・・・？」

「器ってのは、簡単に言えば力・・・パワーを入れておくもんだ」

「それが大きいって・・・？」

「まあ世界が数十個入っても問題ないような・・・器・・・まあ俺の100万分の1くらいだけだな」

「あんたがチート性能なのはわかったから早く俺について説明しろks」

「お前口悪くなってきたな、いやそっちが素か？ま、いや、まあ器だけ大きいなら別に世界もお前を追い出したりはしなかっただろうな。だがお前はあの地球を持ってる力に方向を加えてぶつけるだけで木っ端微塵にできるような力を持ってるんだ。だから・・・棄てられた」

「・・・ごめん、スケールがでかすぎて・・・」

「まあ・・・お前は俺の次にチートだな。他の神でさえデコピン瞬殺あぼぼーんwwってな風な」

「神を瞬殺・・・なあ・・・もしかして・・・」

「あ？」

「さっきの話ってまだ適応中！？！？（超興奮）

「え・・・いや・・・」

「どっちだ！家！？AIBO！」

「落ち着けやあああああああああ！」

side out

side 京夜

「はぁ・・・はぁ・・・」

「なんかごめん、でもさ！最強じゃん！オリ主TUEE！ってできるよ！やったね！きょーちゃん！」

「おい！やめろ！それトラウマなんだよ！・・・ん・・・お前・・・力を使うってことは・・・」

「命を背負う覚悟があるか・・・でしょ・・・あるよ・・・あの闇は死後の世界だったんだろ・・・？怖かったよ、あんなの見てしまった後に命を簡単に奪えるほうがおかしいよ」

「見たのか・・・アレを・・・」

「うん・・・悲しみ・・・憎しみ・・・怒り・・・喜び・・・色々混ざり合っていた・・・」

「正確には死んだ魂の残留思念だ、本体は輪廻転生するからな。」

「でも・・・殆ど変わらないよ。あれはその人が生きてきた証拠であることに変わりない」

「くくく・・・」

「なんだよ、気持ちわるい」

「お前・・・面白いな・・・」

「・・・つぶ・・・なんだよ・・・シリアスだったのに」

「個人的に気に入った・・・お前を転生させてやる！俺の純度100%友情でできた邪神の加護＋アニメとかの能力付だ！」

「なんだってー！そんな邪神様にしびれる！憧れるう！！！！！」

「まあ・・・もう手に入れることはないとおもっていたからな・・・この暖かさは・・・」

出会い（後書き）

はい、くるみいです！ははは文才無いいうな！gggg言うな！
あ、石投げない・・・あっ！いい！いい！

さて・・・今回は転生するために結構ゴリ押ししました。

邪神様も一緒に降ります。ですが殆ど下界であった女性とラブって
ます。（であった描写なし、もしかしたら書くかも・・・？）

世界の仕組みと能力付与

side 京夜

「あーそういえばさ、俺世界に棄てられたって言ったけど、アノ不幸はいったい何？」

「ああ、奇跡ってあるだろ？あれは世界が干渉してるからなんだが、現象を起こす程度、鉄柱落したりだとか、トラック運転手眠らしたりだとか、そういうのはその世界の生命体から1mmくらいの力ふんだくってできるんだが、追放とか、まあお前がされたやつだな。あれは世界の寿命を10分の1支払うって行使できるんだよ。俺は力小指程度でできるけどな？まあ、だから寿命を減らしたくないから奇跡を使ってお前を殺そうとした。殺したら天界の輪廻課に送られる、そして異常な力を持った魂はその力を取られるんだ。」

「なるほどなるほど」

「んじゃま、準備しますか、能力どうする？」

「んーなんでもいいの？」

「ああ、お前の器5%くらいしか埋まってないぞ」

「まじか！？それで地球木っ端微塵って・・・」

「あーそれ、説明長くなるが・・・聞か？いや聞いとけ、自分の力にも関係するからな」

「ああ、頼むよ・・・暗くないよな？その話」

「大丈夫だ、問題ない。まあ世界・・・つつつても次元とか色々あるから一くくりにできないんだが、俺らの次元の世界は”全界”、”上位界”、”中位界”、”下位界”、”離界”がある。”全界”は神や死神、悪魔、墮天使、神獣、その他が住む世界、神といわれる存在と悪魔という存在が仕切っている。ここまでで質問は？」

（ん？それって結構危ないんじゃない？・・・？）

「墮天使とかは大丈夫なのか？・・・その・・・他の天使たちと居て」

「前まではアレだったんだが、普通の神と墮天使とが子をなしてな、それで別にいいんじゃないかってことになったんだ。元々もう天使から墮天使になるってことはない、墮天使っつー一つの種族なんだ。」

「そうなのか、わかった続きを頼む」

「はいよ、それで”上位界”これは・・・あー世界っていうのは自然発生と神が作るのでは容量とかは変わらん、変わるのは耐久性だ、魔法ですぐぶっ壊れなかったりとかかな。まあそれでだ、”上位界”これは生命が自然によって生まれ育ち、進化していった世界だ。生命が自然から生まれたことによって新しい世界の糧となりやすい。」

（糧って・・・なんかいやな感じがするな。）

「糧になるって言うのはどういうことだ？」

「漫画とかアニメとか、そういう物が人気なる、そうするとその物語が世界になる。」

（そういう意味の糧か、なら問題ないな、問題があっても何もできないんだが・・・）

「把握した、それでそこに介入とかできるわけか」

「まあ実際、その物語の世界には介入できない。ま、この説明は後だ、んでだ、さっき言った世界とかが”中位界”に属する。だが”中位界”の殆どは激しい魔法、気のバトル物とかだ平凡日常とか、現実系の戦闘は”上位界”に属する。まあさっきいったが世界と人に神の加護をかけて世界を作る。人に加護をかけるのは、そうしないと魂が自分の放った破壊力に耐え切れないからだな。一気にいくぞ、次は”下位界”呼びづらいのは気にするな、即興だからな。まあ下位界は悪魔とかが荒らしすぎて神が介入しても再興不可能で寿命を待っただけの世界のことだ。まあ元の物語に、ってことで別に無法地帯で「ヒヤッハー」って意味じゃあない。そして”離界”俺たちがいる世界と世界のに神が意図的に作った空間のことだ。」

「じゃあ離界ってのはそこまで重要じゃないのか？」

「ああ。お茶したいけど外がうるさいな、そうだ、離界を作ろう。こんな感じだ」

「軽いな！？おい！」

「んでお前の力は中位界と相性が良いから中位界に送るからな」

（相性がいいってどういうことだ？？）

「相性がいいってどういうことだよ、つか俺に選択権は！？」

「ねーよww相性は世界が壊れ辛いつてことだ。お前の力ぶち込んでも壊れない。なんせ・・・俺が作った世界だからな！！！！！」

「・・・あっそ」

「ちょ！？結構傷つくぞ！？それ！・・・まあいい、んで能力決めるぞーお前の容量ならなんでもOKだから言えや。あ！でもあまりやりすぎると人格壊れるから注意しろ。あと送る世界は「ネギま！」だお前好きだったろ？あとお前の魔力、気はネギま、の全生命体の12乗くらいだから！」

「まあ、神超えてるんだから当たり前か、じゃあ能力は・・・」

- ・直死の魔眼・真理解状態、副作用なし
- ・見稽古 ..チート仕様
- ・超一流の曲弦師、音使いの能力
- ・武器・楽器のガンダールブ的な能力
- ・容姿を好きに変えられる力

・能力を作る能力

「これくらいかなあ？」

(さっき怖いこと言われたからコレくらいしかできなかった・・・)

「・・・お前容赦ねえな・・・まあそれがお前か・・・」

「それでも譲歩したよ？」

「・・・もういい、んで俺もネギま！にいくからな「さてよ！俺のオリ主人生を邪魔する気か！俺の夢を！茶々丸は絶対n「いや、俺は介入しない、つか俺を普通の人は好きになれない、本能が避けるんだよ。」

(・・・そんなのってありかよ・・・それってずっと一人だったってことじゃねえか・・・)

「わりい・・・」

「ははは！なにしかした顔してんだよ！・・・お前は俺の友達じゃないのか？／／／」

「・・・つぶ・・・ははははははは！！恥ずかしいなら言うなよな！ははは！」

(そうだよな・・・俺がこいつを一人にさせなきゃいい・・・傷の舐め合いか・・・昔の俺もよく言ったもんだ・・・ははは！)

「~~~~~！！！！もういくぞ！ほら！今すぐいくぞ！！！！」

「あゝ後もう1つ従者がほしいゝかわいい系か美しい系で！」

（ペット飼ってみたかったんだよね！！）

——京夜は後で後悔する・・・なんでもっと詳細を言っておかなかったのかと・・・——

side out

side 邪神

こいつ後で絶対殴る！思いっきりなぐる！ぜってーゆるさね！！！！

「~~~~！！もういくぞ！ほら！今すぐいくぞ！！！」

「あゝ後もう1つ従者がほしいゝかわいい系か美しい系で！」

（あ？何言ってるんだこいつ、まあ当然か丁度一番性欲が出てくる時期だからな・・・）

「わかった、容姿は俺が造っていいのか？」

「おうよ！一番いいのを頼む（キリリ）」

（ふむ、久しぶりだな、従生命を作るのは・・・）

「よし！能力付与と従者製作は終わったぞ！」

「マジかー！出発しようZEE！！！！」

「クスリッ・・・ああ・・・いこうか・・・」

（ああ・・・本当に・・・悪くない・・・お前は絶対に失わない・・・
・全界を滅ぼしてでも・・・な）

「じゃあいくぞー、転移陣起動〔離界N.O. 3221から中位界物語〕ネギま！”平行世界N.O. 235へ、【製造者・エルティアスに許可を申請します】【転移許可申請を許可しますか？】」

「んじゃいくぜー」

俺がそういうと申請を許可した。その瞬間俺たち二人を凄い光量が包み込んだ。

「ああ、俺とお前は基本別行動だ、強すぎるのが二人居ると世界が壊れるからな。」

「了解、遊びにこいよー？」

「わかってるよ。またな・・・”相棒”／／／」

「！・・・ああ！またな！”相棒”」

そして俺たちはネギま！へと旅立った

side out

side?..?

「まあ・・・あのエルが・・・ふふふ・・・罪を償うのではなく・・・罪と生きていくのですね・・・私はあなたが進むのを待っていましたよ。あの人の子には感謝しなければいけませんね。エル、いつでも会いにきてください、私は貴方の・・・」

———母親なのですから・・・

世界の仕組みと能力付与（後書き）

どうも！くるみ입니다！今回は邪神の名前と慈悲女こと母親がでてきました。

エルティアス（以降エル）は昔犯した罪によって邪神となりましたが普通は母親さえも離れるのですがエルの母親だけはずっとエルのことを心配していました。

ヒロインアンケートですが、11／15までが第一次募集です。

邪神の悪戯と勘違い（前書き）

やっちゃった・・・俺の妄想大暴走！もうなにがなんだがわけわからめwwww

ここからはa11京夜サイドです。分けると色々gdgdになりやすいので、わかりやすくします。少し視点を分けないとわかり辛かったら別の話であげます。

邪神の悪戯と勘違い

あのバカみたいな光に包まれて数秒してやっと前が開けてきた。

「うー・・・目が・・・っとうあ・・・コレが死・・・、オフしとこ」

つかアイツいつの時代に飛ばしたんだよ・・・つか・・・体に違和感？よく体を観察する・・・

華奢で力をこめただけで折れそうな華奢な腕、同じく足、すっきりとした胴回り、鈴が鳴るような美しい声、少し膨らんだ胸、そしてなければならぬものがない・・・この条件から推測されるのは・・・

「あんの糞エルが嗚呼あああああああ！！！！！！！！！！ってあれ？なんで俺アイツの名前知ってた？まあアイツだから仕方ないか・・・どうせ能力付与のときに突っ込んだんだろうな・・・」

そして俺はアイツにもう一回出会ったら死の点を突くことを誓って歩き出した・・・が！

「貴様！連合の人間か！」

なにこの状況300くらいの部隊がか弱い女の子を囲むってどうよ？

「え・・・あの・・・（涙目）」

「ゴフッ！」「わが生涯に一片の悔い」ここに俺の幻想が・・・」

なにこのカオス．．．．そして光を屈折させて俺の顔見たら超
かわいい．．．ハア．．．ん？

！？なんだ！？このアホみたいな力．．．って．．．え？なにあの
美しい人．．．女神ですか？

陶器のような肌、紺色の、だけどどこか透き通ったとても神々しい
髪、とても美しくかわいらしく整った顔．．．俺に引けをとらない．
．．．！．．．．．自分で言っただけで悲しくなった

「貴様等、私だけの可愛らしく可憐で儂いお嬢様の涙目を見たんだ．
．．イキテカエルトオモウナヨ」

ちょ．．．殺気がやばい．．．つと．．．いきなり軽く．．．ああ
俺だけ外したのか．．．っってお嬢様？

「お嬢様．．．エルティアス様に創造していただいた従生命体でござ
います。（美しい．．．このお方が私の主．．．ゴフ）」

「（吐血！？）ビクッ！え．．．従者？え？」

（．．．ああ．．．昔の俺．．．なんでもっと詳細に説明しなかつ
た！！！！！俺の歳って丁度そういうこと考える歳だからとか思っ
てやったんだろうなあ．．．嬉しくないわけじゃないけどさ☆むし
ろ超嬉しいなにこの女神）

——ビシャグチャ

「．．．え？」

一瞬で周りの人間がバラバラになっていた。

「さて、このような穢れた場所にずっと居てはいけません、少し移動しましょう。」

「え・・・あ・・・うん（コクリ）」

「ゴファ！！！」

「ひゃああ！（ビクン！）」

「ブシュ！（愛は鼻から）」

「にゃああああ！（ビククン！）」

以降ループ

それにしてもこの体になってから精神が体に引っ張られてるような・・・感情とかじゃなくて考え方とかは前世の歳相応なんだけど女の考え方、仕草とかが自然なんだよな、中では「俺」なのに「私」になっってしまう。怖いさすが邪神怖い

「お嬢様、怖がらせてしまって申し「アリしゅ・・・アリスって呼んで！！」・・・私の生涯に一片の悔いはありません・・・エルテ

「イアスさま創造していただきありがとうございました・・・」

（アリスはロリ、陶器肌と来たらこれしかないと思った・・・って
考えてる暇じゃない!!」

「戻ってきて〜!お願い〜!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

うぐ・・・こうなったら俺の精神ダメージがカンストするが・・・

「ひっく・・・えぐ・・・起きてよお・・・」

「ガバツ!」すみません、お嬢様、私は少し幻想を見ていたようです。今も十分幻想卿ですが」

それより白いメイド服がブラッドな色になってますよ・・・

「では、アリスお嬢様「お嬢様は嫌っ」orzわ・・・わかりました・・・アリス・・・さ・・・様・・・う・・・」

「う・・・うん・・・（あ・・・コレってダメだったパティーン?）
あ!そろそろ出発しよう!?!」

「お嬢様はダメ・・・お嬢様がダメ・・・メイドなのに・・・アリスさ・・・様かわいいのに・・・可憐なのに・・・」

「ああ!もういいよ!お嬢様で!だから立ち直って!」

「はい!では出発しましょう、私だけのお嬢様——」

邪神の悪戯と勘違い（後書き）

変態メイド型従者登場もちろんあのナイフの人を参考にしました・
・！

登場人物説明

名前…アリス・K・ティアス Kは神戯^{カミギ} ブチ切れ時…零崎 狂夜

身長…150cm いくかいかないか ブチ切れ時182cm

体重…黙秘します♪（なんかイヤなんだよね）

一人称…「私」 ブチ切れ時「俺」

容姿…透き通って光が当たると神々しく光り輝く髪を持ち陶器のような肌ととても可愛い顔、だが自我を忘れるほどブチ切れたら元の京夜の姿に戻る。で左目が黄色で右目が青（左目が？で右目が直死）

性格…（夜のみ）ドMというより周りが可愛さのあまりに攻め立てまくるので全ての矛先が自分にくる。通常はノーマル、自分が気に入らない奴や、正義バカには鬼畜DS

年齢…12歳 ブチ切れ時20歳

能力…世界の全生命体の総量を12乗した数が気・魔力・妖力・霊力・神力（邪神の加護）

直死の魔眼…原作どおりの効果、だが副作用なし、完全に理解しているの”見る”ことができれば現象でさえ殺せる⇒エヴァの呪いなど

見稽古…刀語のアレをチート仕様にしたもの。1度見たものを70%コピー、加護の才能、成長率強化によって1時間訓練すれば120%ほどになる

曲弦師・音使い…邪神のミスによって”才能”だけ与えたので戦闘ではまだ使えない

容姿を好きに変えられる…変えようとがんばったが従者の愛の力によって破壊された。任務のときのみ使用可能

能力を作る能力…コレはブチ切れた、または人を助けるためのときしか使用しません。

名前…エルティマス

身長…187cm

体重…わからない

一人称…俺 わし 俺様

容姿…ヘルシングの旦那のような容姿、だが内面はものすごく優しい、全身黒服を着るキン・ダム・ハーの黒機関みたいなのが戦闘服
仕様武器は鎌

性格…基本優しいが外見で怖がられることが多い、京に会うまでは負で覆っていたため周りからは本能で避けられていたが京と在った

設定・使命などは命令として与えられメンドクサイと感じていたが
本人にあつて電流走る、この人にすべてささげようと思った。夜以
外は従順

登場人物説明（後書き）

今回は設定でした。4時間ちょつとなのですがもう見てくれる方がいてとてもうれしかったです^^ありがとうございます。

鳥頭に女好きに犯罪者（前書き）

やばい、アリスとフリージアたのしい

鳥頭に女好きに犯罪者

sideナギ

おつす俺はナギ・スプリングフィールド！未来の英雄様だ！

まあ今は【紅き翼^{アラルブラ}】のリーダーをやっている！

まあそれはいいとして・・・

「これは一体なんだ・・・？この鋭い切り口・・・刀でもこうも見事には・・・」

「それほどなのですか？」

「ああ、アルか、この切り口はありえないほど鋭い私でも無理だろうな・・・」

な！？えーしゅんでも無理だあ！？

「おい！それまじか！？」

「ああ」

「ですが、敵方を攻撃した、ということは”まだ”連合の敵ではないということです」

「そうだな、一旦戻ってみんなと話し合おう」

「ああ、そうだな！皆！一旦戻るぞ！！」

一体誰があんな・・・ああっ！考えんのは俺の仕事じゃねえ！俺はぶっ飛ばす！ただそれだけだ！！

side out

sideアリス

さて、まずは歩いてるわけですが・・・この従者異常に私の行動に敏感で転びそうになったらクレーター作るほどの速さで助けに入ってくる。マジで自然破壊やめて。ん？この気配・・・

「あれ？このでかい感じ・・・【紅き翼】??」

「つつ！私とアリスお嬢様の時間を邪魔するとは・・・ゴミ共が消失去ってやる・・・ククク」

「ちょっ！キャラが・・・変わってるよ！」

「では少しいって来ますね♪」

(まづいまずいまずいまずい！これは、いきなりBAD ENDとかマジ勘弁してほしい・・・こうなったら・・・)

「一人にしないで・・・？(涙目)」

「バタッ」

ふう・・・なんとかフラグ回避・・・

「おい！そのやつら！」

ん？なんだあの赤毛・・・ってナギ！？それに詠春・・・ロリコン・・・
・ヤバイとくに最後の・・・

「な・・・なんでしょうか・・・（プルプル）」

これやっときゃなんとかなる・・・あああああ！ロリコンがいる
の忘れた・・・

「ゴフアアッア！！私の生涯に一片の悔いもありません・・・」

「君たちはここでなにをやっていたんだ・・・！？その女性は
大丈夫か！？」

「え・・・スルーですか？・・・フリージアは大丈夫だと思います・・・」

「はい。問題ありません」

二人は顔を赤らめた・・・まあフリージアだしね、人間国宝だしね、
女神だしね

「ちょ・・・！！／／／／」

「・・・／／／」

「私の幻想卿・・・ふふ・・・」古代禁忌魔法——捌きの炎——
ドゴオオオオオ！！！！！
ルミナスフレア

「「！？」」

え・・・容赦なし？うそ・・・

「てめえ！なにしやがる！！」

そういうながら武器を手にする・・・

「なにいつてるんですか、こんな幼い子に発情するゴミなんて消毒するに限ります。私は発情しているのではなくて弄りたいんです！」

「それを世間では発情してるっていうんじゃない？」

さすが詠春ナイスツツコミ

「まあ、そんなことより、お前等強いな！俺の仲間になれ！！」

「はぁ・・・あんなロリコンがいるところ」「いいですよ」お嬢様あ
「！！！！！！？」

「いくところないですしねー別にいいじゃない？守ってくれるんでしょ？」
(ニコ)

「！！！！はい、わが主・・・」

「これで鼻血を流してなければ完璧だったな」

言わないで上げて詠春

鳥頭に女好きに犯罪者（後書き）

はい！くるみいです。

今回は紅き翼に加入する場面です。

ヒロインアンケート11／15まで！

初めてのブチ切れ（前書き）

今回は切れたらどうなるのか〜というおはなしです。

初めてのブチ切れ

ナギたちと一緒に行動して結構時間が経ったんだけど・・・

アルビレオが異常に私に話しかけてくる。コスプレは好きかとか、色々そしていやらしい目で見てくる。そしてルミナスフレアで燃やされてる。まあそれはいいとして、

いま、戦場にいます。

「黄昏の姫御子まで出してくるとは・・・」

「だって王族だろ！？まだ小さい女の子だって言うし・・・」

「ナギ、冷静にそしてうるさい」

多分私が一番イラツイテル、なにかわからないけど昔から力による強制的なものには胸焼けがするほど嫌悪感を抱いていたがこの頃それが激しい。

「・・・アリスお前が一番落ち着け・・・その殺気に当てられてはたまらない・・・」

「・・・ごめん」

「殺気にあふれるお嬢様・・・ああ！でもそれがいい！！」

「空気を読んでください」

「「「「アルがアリス関連で真面目なことをいった!?!?」」」」

「いくら私でも怒りますよ? #」

「冗談だつての! アル!」

「ナギ! 鬼神兵が向かつてる塔だ!」

「わかったぜ・・・っち! おい! アリス先にいけ! お前のそのチー
トなら抜ける!」

「わかった! フリージアはみんなの援護お願い」

「承知」

間に合つて・・・アスナ・・・

着いた! あれは・・・アスナ! ?・・・体の中がボロボロだ・・・酷
い・・・ミニクイ・・・

何でこんなこと・・・——アイツラトオナジ——・・・

「貴方たち・・・そんな子供まで担ぎ出すことはないわ・・・」

「お前は・・・紅き翼・・・【神速の槍】・・・」

「つく！こいつは私たちの”所有物”だ貴様に言われる筋合いはない！！」

「ピク」なんていいました？よく聞こえませんでした・・・」

コイツイマナントイッタ？

「こいつは私の”所有物”だ・・・」

クロス

ゴオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

そんな暴風が吹くほどの風と共に現れた黒髪の男、金色の目と青色の目をした男、
ただ目の前の蟲を駆除するという眼をした男。人目でわかった、こいつは・・・

——圧倒的強者——

気がついたら瓦礫の上に立っていた、アノ老害が所有物といった瞬間からの記憶はある。

記憶が正しければ仲間を攻撃してしまった、、私の力が未熟なせいで・・・

「やっととまったか、このじゃじゃ馬むすめえええ・・・！」

とナギがいう

「夕風が粉碎するかと思った」

と詠春がいう

「他のみんなは・・・？」

と私が震えた声で言う

「皆は・・・」

「え・・・？」

「お前の後ろだww」

「ああ・・・お嬢様のおい・・・」

「にゃあああああああああああ！！！！」

所変わって野宿中。皆には私が回復を施した。さすがチート万能だ
その後今回のことを謝った・・・が皆気にしてないといい私を殴っ
た！痛い！

チートボディといっても痛いものは痛いのだ！！

そして今鍋の準備中！あんなことがあったので今日は景気祝いだそ
うだ。

そこまで祝う・・・というか・・・ねえ・・・もっとシンミリとか
暗いとかじゃないの？

まあこいつ等バカだしね・・・私だけ気にするのバカらしくなって
きた・・・

「んっふふっこいつが旧世界は、日本の鍋料理ってやつかあ」

「じゃ、早速肉をっ♪」

「あつ、ナギ、おまつ・・・何、肉を先に入れてるんだよ」

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

鍋のやり方がなっていない・・・。その辺は詠春に任せるが、面倒だから！そして言い忘れていたがいま鍋をしている！・・・ナベ？鍋ってアイツがこなかったっけ・・・あの筋肉達磨がくるんじやなかったっけか！？あれ？記憶があいまいなんだy「食事中失礼！ッ！！！」ああ・・・私は正しかった

「俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン！！いっちょやろうぜッ」

まあ・・・本を読んで時はあまり思わなかったですけど目の前でやられると・・・ねえ？

「何じゃ？あのバカは？」

「帝国のって訳じゃなさそーだな。えいしゅ・・・お、お！？」

「フ・・・フフフフ・・・食べ物を粗末にするものは・・・！？！？」

「あはは！おじさん・・・すこしOHANASHIしようか・・・！」

「「「さて逃げよう」「」」

「お嬢様・・・美しいです・・・」

初めてのブチ切れ（後書き）

こんなggdggdで大丈夫か？大丈夫じゃない・・・大問題だ！

初めての夜

私は今、宿の部屋に居る、一旦ナギたちと離れた、事情は・・・まあこの前のあれだ
やっぱりあんな簡単に割り切れない

はあ・・・あんなことがあって・・・あれ？私心の中でも私になつてない？

まあ、そこまで気にしないけどさ、

「あら、まだ起きていたんですか？」

「リーザ・・・」

ちなみに長いということと愛称はリーザになった。もっとどうでもいいけど二つ名は【断罪の女神^{ギロチン マリア}】という二つ名だ、

「あれは仕方ありませんよ、いくら加護でも、いくら友情だったとしても、その加護は”邪神”の加護なのですから」

「う・・・ぐす・・・えぐ・・・でも・・・」

「ですが貴方が悪くないわけではありません、もう少し感情を制御できるようにしてください。もうこれ以上大切なものを傷つけないように」

「うん・・・ねえ・・・」

「はい？なんでS「ギユ」！？」

「少しこのまま・・・」

sideリーザ

ヤバイヤバイヤバイコレハヤバイあんな「感情を制御しろ（キリリ）」とか言っておきながら襲うとかシャレになりませんヤバ・・・

「ああ・あ・あ・・・ああのお嬢様ままま？」

「・・・ん？」

「感情の制御ってとても難しいんですね・・・（遠い目）「へ？」すみません・・・私”本能”に従わせていただきます」

「え？ちょ？ま？え？・・・うん？えーっと・・・」

（カーツ／／／）サツ！（↑逃げる音）ガシィ！

「逃がしません・・・誘ったお嬢様が悪いんですよ・・・？」

「え・・・あう・・・／／／」

「さあ・・・？」

—————楽しみましょう？—————

初めての夜（後書き）

さてはて一線を越えました！
後悔も反省もしない！だが・・・私の黒歴史の一部になったと言っ
ておこう

邪神と神子の大喧嘩！（前書き）

悪戯の付けが回ってきました

邪神と神子の大喧嘩！

sideエル

降りてきてから結構経った、降りてきて一番驚いたことは普通に人が関わってきたのだ・・・コレはおかしい、神でさえ寄り付かないというのに何故だと考えていたらその答えは案外簡単に出てきた。ああ・・・京か・・・ふふ・・・アイツはココまで俺を変えていたのか・・・本当にアイツは・・・
そういえばアイツを悪戯で女体にしたがどうなったかな？

「ふふw楽しみだ・・・そうと決まったらすぐ実行！【転移陣】発動！」

そう叫ぶと大きな光が走り、光が収まった時にはもう誰もいなくなっていた・・・

side out

sideアリス

はい、従者に捕食されたアリスです。・・・うんなんとなく予想はしてたよ？でもあのタイミング・・・私も考えないでやったのは悪いと思うけどさあ・・・とにかく・・・

「エルに会ったら絶対殺る・・・」

「!？お嬢様!!いくらエル様とは言えエル様とやるのは私が全力で阻止しま「何勘違いしてるの!？殺人のほうだよ! killだよ!」」

「ああ・・・そちらなら問題ありません」

まったく・・・リーザは全部下関係に持っていこうとする・・・というかエルを殺すって言うのには反応しないのね

ピカー!!

「なんぞ?!?!?」

「迷惑ですね・・・まったく」

「おい・・・作ったの俺なんだが・・・?」

この声は・・・エルか!!この恨みここで晴らす!

思うが早いか神速の速さでエルに接近する。接近中に【武器製造】の能力をつくりナイフを製造。

そして直死を発動して死の点一突き!

ドスッ!

「・・・ふふ、貴方の自業自得ですよ?」

「人を勝手に殺すんじゃないよ!つかいきなり死の点突くな!俺じやなかったら死んでるぞ!?!」

「ゴキブリ並みの生命力ですね」

「お前俺が作ったんだろ！？なんでそんなに態度悪い！」

「私の主はアリスお嬢様だけです。野郎には興味ありません、消えてください」

「／／／／／」

「これは酷い、何があった」

——状況説明中——

「H H H H H A ☆まさか計画通りに進むとは・・・！！くく・・・」

「あ”？」

「いやなんでもねえよ・・・つかなんで男に戻れてる！？」

「しらねーよ、切れたら戻るみたいだな」

「ああ・・・加護か・・・」

「そんな能力があったのかよ・・・おい！この際だ！あの離界に居たときに聞いた「実際は介入できない」ってヤツと”邪神の加護”について説明しろや！」

「もちろんだ、そのために着たんだよ・・・（今思い出したけどな）」

「なんか変なこと考えなかったか？」

「い、いや？何も考えてないが・・・？（なんか勘が鋭くなってきたぞ？）」

邪神と神子の大喧嘩！（後書き）

はい、くるみいです。

邪神様再登場！ちなみに邪神様は結構前からこの世界にちよつかい出してるので下準備は完了しています。ご都合主義万歳wwwwらんらんーwwww

あと感想ください！この小説に関すること、「こうしたらいいんじゃない？」「こういうイベントやってほしい！」「戦闘描写もつと書け」など批判も受け付けてます。ドシドシ送ってください

平行世界

「さてと、まず先に介入できないってのはだな、オリジナルの世界について意味だ」

「ふむ、ということはだ、平行世界なら介入できるんだな？」

「ああ、ネギを殺そうがナギを殺そうが関係ない。ただの似ている世界なんだからな。だが、平行世界といっても色々あるんだ、ナギが頭良かったり「ありえねえええ！！！！」ネギが紳士だったり、超が改変にきたんじゃないかって、ただ事故で飛んできただけだとか「そっちのほうが平和じゃね」茶々丸が生まれてなかった「いやああああああああ！そんな世界いらねえ！ぶっ壊してやる！！」たとえばの話だ！落ち着けアホ！あとライフメイカーが本当に人のことを考えて善作を練ってる世界とか、アーウェルンクスシリーズに喜怒哀楽がある世界だとかな。」

「本当だな！？この世界は茶々丸いるんだな！？」

「ああ、問題ない。お前がチョツカイださなければな？」

「オリ主は謹慎します！」

「まったく・・・んでこの世界の特色はひとつだ！「コスモエンテレケイア一体それは！？」ライフメイカーが綺麗・・・まあ必然的に完全なる世界が綺麗になるわけだ・・・が・・・」

「なんか歯切れ悪いな」

「普通平行世界に入るにはその世界の管理者に許可を取らなきゃならん、だが俺は邪神だからな、転生者の処分に使われちゃってる。許可をとらなきゃ駄目なそこらへんのルールが無視されちゃったんだな、この世界に多数の転生者がいる。まあ12人くらいか?」「茶々丸ううう!!! いやああああああああ!!!」

「落ちつけ! コレでも20人はつぶしたんだ、そして12人の内2人は無害だ、平凡を求めて能力も植物、動物と会話できる能力だの、料理が美味く作れるようになるのだ。だが10人のうち3人が厄介だ。原作の可愛い子全員奴隷にするだのほざいて「クロス」落ちて、まあ俺の世界だから茶々丸が作られるのは強制的に組み込めるから安心し「そんなエル様にしびれる! 憧れるう!!!」「テンション上がるのいいが・・・その・・・後ろの従者が怖いから」

「ゴゴゴゴゴゴ）・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ん? お前のことが嫌いって訳じゃないよ、ただ俺って結構節操なしなんだよね?」

「それなら問題ありません・・・・ですが・・・・あまり多すぎるとOHANASHIしますからね」

「お・・・・おう・・・・」

「話終わったところで”加護”に付いての説明だな! コレは超チートだぞ? まず武文関係なく鬼才レベルだ。」「ちょ! ?」「正確にはそのレベルまで訓練すればなれる、まあ見稽古あるからもっとチートだ。見てわかるってことはその武術の真理を理解してるってことだからな。」「なるほろ」シャマキンなつかしいな、おい、あと力のセーブ、んでどういう理屈かわからんが性別が逆転したっぽい☆」

「なんて素敵な加護なんでしょうか・・・これだけは感謝いたします」

「俺的にはアレだけだな・・・」「あら、喜んでいらしたではありませんせんか・・・あんなかわいらしい声で喘い「あーあーあー聞こえない聞こえないーあーあーあー」

「後切れたときに本能が全ての力を使って敵を殺そうとする。これはお前の本質だ、加護はその本質によってお前を壊れないようにする保護膜みたいなもんだ。」

「じゃああの暴走は俺が感情を制御できれば起きないのか？」

「そうなるが、まあ生き物だ全部は無理だろう」

「やっぱりそうか・・・まあできるだけ努力はしよう・・・」

「そうだな、まあそのことでお前が壊れても俺がいつも一緒に「私がいづまでもお嬢様を見守っています」

「・・・まあいい・・・あと麻帆良の土地あれ俺のだから」

「はあ!？」

「たしか麻帆良の土地管理者は【鮮血の死神】・・・ああ・・・そのまんまですね容姿」

「確かに・・・」

「結構傷つくんだが・・・」

「はははWまあいいんじゃないか・・・ん？念話？」

『アリスですか？ガトウがあわせたい人が居るとのことですので2日後の早朝・・・6時頃いつもの場所で』

『会わせたい人？わかった2日後の朝6時だね』

『はい、あ！リーザもつれてきてくださいね？』

『了解・・・アル・・・ごめんね』

『まだ気にしてたんですか・・・？そんなに踏ん切りがつかないのなら私の抱き枕に・・・』

プツッ！

私は念話を切って二人に話しかけた

「リーザ！2日後の朝6時にいつもの場所集合だって」

「承知・・・ではここの紅茶の葉を買ってきますね」

「んじゃ俺はソロソロお暇するよ」

「ん。じゃあまたね、麻帆良で必然的に会いそうだし・・・」

「そりゃあな、まあ正義の魔法使いがウザイけどあいにくさ！じやな！」

ピカー!

相変わらず眩しいな・・・

「まったく・・・もう少し光量抑えられないかな？」

平行世界（後書き）

平行世界の設定と加護の説明です

再会、そして決戦間近

あの念話から二日後私たちは待ち合わせの場所にいる。もうそろそろきてもいいと思うけど・・・？

「またせたな！！」

「まったよおー！この鳥頭！！30分遅れてる！！」

「おま！？この前俺たちを半殺しに居たやつ言うことじゃねえぞ！！？」

ちなみに私が男に変わる事などは聞かないでくれる・・・まあ「なんだ・・・ただのチートか・・・」と詠春とガトウに言われたけど・・・否定できなかった・・・

「お！すんげえぺっぴんじゃねえか！俺とランデブーでもしねえか？」

「――其は全てを凍てつかせる絶対氷河「皆逃げてえ！？」」「言われなくとも！！！！」「あ？なにがだ？」

あの時リーザは遠くから観察していたので筋肉はリーザの事を知らない⇒＋という結果に・・・

「――罪深き者に死は生温い――ならば与えよう永遠の苦しみを――透氷に生き狂え」

【永苦氷棺】アフソリユート 「なぬおおお！！？？」

キイイイイン！という甲高き音と共にそそり立つとても美しい、
 けどどこか悲しい氷が現れた

「その氷棺はかつて最強の墮神を封じ込めた物です。永遠にそこで苦しみなさい」

『ぐおおおおお!!!
【気合脱出】!!!
』

バキイイイイン！！！！！！

[illegible]

「さすがネタ担当……恐ろしい筋肉ですね……」

「アルそこ突っ込むところじゃないよ？」「おや？私にアリスが突っ込んでくれるなんて嬉しいですね♪」

「オマエが入ルカ?」「遠慮しますよ……(ガクガク)」

「それより早くしてくれないか？大物なんだが・・・」

「ああ！ごめん！皆いこうよ！」

「ゴフウウ！・・・了解ですお嬢様・・・」

「またこのパターンか・・・」

「ふふ……かわいらしいですねえ……ガシイ！」

ドカ！バキ！ボキン！グシャ！ビチャ！

なんか後ろで聞こえては行けない音が聞こえるけど皆顔を汗でぬらして後ろを振り返らず歩いていく・・・私も早くいこつと・・・

で、今はそのガトウに呼ばれて本国首都に来ている。

協力者に会うそうだ。

「それで？ 協力者って誰なのお？」

私がそう質問すると実にいいタイミングで一人の男が近づいてきた。

「マクギル元老院議員！」

「いや、主賓はあちらのお方だ」

そこに登場したのは、ウエスペルタティア王国アリカ王女。

綺麗っちゃ綺麗なんだけど、キャラがリーザと被っているため見劣りしてしまう。

ジャック（呼び方変えた）が話しかけているが、『気安く話しかけるな下郎』と一刀両断。

ナギは見惚れている、ナギの好みドストライクだったようだねえ

話し合いの内容は要約すると戦争を終わらせたいから力を貸してくれって感じだった

その後ナギは見惚れてたことをネタにされジャックに弄られている。うん、私もジャックにリーザとラブイチャしてることを弄られたんだナギも弄られる！！

そしてようやく『完全なる世界』の存在が明るみになり、私達は休暇中『完全なる世界』についての独自の内定を開始。

完全なる世界・・・綺麗なんじゃないの・・・？まさか転生者がなにかやったのか？まああって見なきゃわかんないよね

——キングクリムゾン——

「ほい、チェックメイト」

「む、おぬし本当に強いのお・・・」

私たちは今リーザのお茶を飲みながらチェスをしている相手はゼクトだ。

「ふ・・・チートボディを舐めちゃだめだよ？」

「おぬしがそれを言うとは異常な説得力があるのお」

んーゼクトに決戦のこと言おうかな？ゼクト個人的にすきなんだよねえー、よし！ガトウとゼクトの生存√D A Z E！原作結構気に入らなかったんだよね？

「あれ・・・ゼクトちよつといい？」

「なんじゃ？あともう一戦するぞ！初めて2回目で負けるなど納得できん！」

結構子供っぽいところあったんだね・・・

「ゼクト・・・死相がでてるよ・・・」

「・・・なんじゃと？」

「ちよつとまって・・・今全部読み終わった・・・占い・・・聞く？」

「自分の人生は知らんほうがいい・・・といたいが・・・今が楽しくて失いたくないという気持ちのほうが大きくなってしまった、聞かせてもらおう・・・」

「OK、占いだと、決戦で「紅き騎士」の身代わりに「そしてそれにより「血塗れた翼」の持ち主たちの内「皆を纏めし剣士」「半生を見る者」が死を迎える・・・って」

「・・・紅き騎士はナギのことじゃろうな・・・血塗れた翼・・・」

「【紅き翼】のことじゃないかな？人を大量に殺してるんだから・・」

「なるほどの・・・剣士と半生を見る者・・・これは詠春とアルか・・」

「多分そうだろうね、よし！絶対決戦で無理しないでよ？私は誰か一人でもかけるのは嫌だからね？」

「・・・仕方ないのお・・・自分だけが犠牲になるならまだしもわしが死ぬことによって詠春とアルが死ぬかもしれんのだろう？ならそうしないほうがいい・・・だがわしがそうしないことで他の奴等が犠牲になるのでは？」

「そこはチートな私とリーザの二人に任せなさい。絶対誰も死なせないから」

「・・・まかせた」

「まかされたぞよ」

「はあ・・・」

ドガガアアアアン！！！！

「何！？」

「何じゃ！？」

「うお！？」

「おやおや・・・」

「なんですかー!？」

「ナギか!？」

「リーザから報告があってナギだそうです」

「戻ってきたら説教だ・・・#」

上から私、ゼクト、筋・・・ジャック、アル、タカミチ、ガトウ、私、
詠春の順番

詠春ご立腹だねえw?

「当たり前だ!!」

「あははw」

———2時間後———

「お? 帰ってきたみたい」

「ゴゴゴ」 ってくる・・・」

「「「ご立腹だね」(じゃの) (ですね) (だな)」」」

「ナギイイイイイ! ! ! ! !」

「ちょ！？　まで！　詠春！！」

「待たん！　【百裂桜花斬！！】」

「うおおおお！！？」

「お！　俺も混ぜろや！　【ラカンインパクト】！！！！」

「てめえええええ！　後でぜってえボコる！」

「神鳴流式の太刀、【斬岩剣】！！」

「どわあああ！？　少し切れたぞ詠春！！」

「まったく・・・お前は姫さんまでも引っ張りまわしてえ・・・しかもアリカ殿もアリカ殿だ・・・なんで・・・」　ブツブツブツ

あらあら詠春がダークモード入っちゃったよ・・・

「まあまあ、大事がなかったただけまだよかったでしょ？　ナギのすることだし、気にすることないよ。気にしてたらやってらんないしね！！！！」

「それもそうか！！　H A H A H A ☆それもそうだな！」

「そうそう！　でも適度に怒ってね！　疲れるだろうケド！」

「まあ・・・仕方ないな・・・ガトウにも手伝ってもらおうよ」

「まあ別にいいじゃねえか！それに見ろよコレ、俺が行った意味があると思うぜ？」

そういつてナギが見せてきたのは・・・メガロセンブリアのナンバー12の執政官が奴らの手先だという証拠

で、現在。私、ナギ、ジャック、ガトウの面々で執政官の弾劾手続きをするためにマクギル元老院議員と法務官に会いに来ている。

「法務官はまだいらっしやいませんか」

しかし、法務官が未だに現れない。

「法務官は……来られぬことになった」

「ハ……？」

「……あれから少し考えたのだがね、せっかくの勝ち戦だ。ここに来て……慌てて水を差すのもやはりどうかと思ってね」

「ハア」

「私の意見ではない。そう考える者も多いということだ。時期が悪

い。時を待つのだ。今回は手を引いてだな……」

「待ちな。あんたマクギル議員じゃねえな。何もんだ？」

こいつは偽者ですね。ナギが仕掛けるはずなので私もそれに合わせて準備する。

ドカン！ とナギが相手の頭を燃やすと同時に（燃やす音じゃない気が？）に私も心臓目掛けて【武器製造】で魔装ナイフ【ペシュカド】を投擲。

「ちよっ！？ ナギおまつ……元老院議員の頭いきなり燃やして……アリス！、お前も躊躇いも無く心臓にナイフ投げるな！！」

「ただのナイフじゃないよ！【ペシュカド】だよ！コピーだけど本物より性能いいけどね……！！」

「アリス、そういう問題じゃねえと思うぞ？そしておっさんをよく見てみな」

「そうだよガトウ。観察眼足りてないよお？」

「何っ……」

炎の中から出てきたのはマクギル議員ではなく白髪の……えっと、一番目だっけ？

「……よくわかったね。千の呪文の男、神速の幼女神。こんな簡単に見——」

ついでに投げた【ペシユカド】のスキルが1つ【黒炎】発動！この私が投げるだけで終わらすとでも？

「全く、まだ喋ってる途中なんだけど。やはり君が一番危険だね。」

チッ。黒炎が身体を燃やし尽くす前に肌ギリギリに障壁張って転移魔法で逃げてまた戻ってきたな。避けるのだけは無駄に上手いやツだ。

「ごちゃごちゃうるせえ！」

ナギが一人突っ込むが、

「通しませんよ」

「くらえ」

と、一番目の仲間の登場で攻撃が阻まれる。

「強えぞやつら！」

「ハッハ。だが生身の敵だ。政治家だ何だとガチ勝負できない敵に比べりゃ、万倍！！戦いやすいぜツ！！」

「同感です！リーザ！やるよ！」

「はい、お嬢様！」

意気揚々と敵を潰しにかかろうとする私達だったが、

「わしだ！ マクギル議員だ。スプリングフィールド、アリス、フリージア、ラカン、ヴァンデンバーグ。奴らは帝国のスパイだった！ 奴らの仲間もだ！ 今も狙われている。軍に連絡をッ……」

「げ」

「やられたな」

「君たちは少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらおう」

「ハッ！ その前にテメエの人生の幕引きが先だろ」

ダダダダ！！

「くっ！ 兵が来ましたこの中にはいつて！」

能力製造で「境界を操る程度有能力」を創造そしてスキマ発動皆が入ったのを確認した後にフェイトと通信

『聞こえますか？ ライフメイカーに何が起こったのか知りたいのですが後で場所の位置を送るのでそこにきてください。もしかしたら貴方の主を助けられるかもしれません』

『！？・・・わかった連絡を待っているよ。』

その後軍の介入により、首都、そして連合を追われることになった。

「タカミチ君たちは脱出できたかな」

「昨日までの英雄呼ばわりが一転、反逆者か。ヌッフフ、いいねえ。」

人生は波乱万丈でなくっちゃな♪」

「かはは。傑作だぜ。やっぱ退屈しない人生ってのは最高だな」

「お嬢様お怪我はありませんか？」

「大丈夫だよ。ありがとね（ニコ）」

「恐悦至極・・・」

「かつこよく言ってるが鼻血が台無しにしてるな・・・」

「詠春言わないで上げてよ・・・まあそれがリーザなんだけどね・・・」

そんな話をしながら私達は辺境を転戦しながら隠れ家を目指した。

まあ皆と一緒に居るのは私の分身体なんですけどね？

再会、そして決戦間近（後書き）

どうも！くるみ입니다。

今回は特に進展はありませんでしたねえ、

それよりも新しい設定と武器、能力を増やしたので後ちよつと進めたら新しい設定集作ります。

設定集

名前…アリス・K・ティアス Kは神戯^{カミギ} 暴走時…零崎 狂夜

身長…150cm いくかいかないか ブチ切れ時182cm

体重…黙秘します♪（なんかイヤなんだよね）

一人称…「私」暴走時「俺」

容姿…透き通って光が当たると神々しく光り輝く白い髪を持ち陶器のような肌ととても可愛い顔、だが自我を忘れるほどブチ切れたら元の京夜の姿に戻る。左目が黄色で右目が青（左目が天眼 右目が直死となっている）

性格…（夜のみ）DM。そして周りが可愛さのあまりに攻め立てまくるので少し泣き虫になってきている。通常はノーマル、自分が気に入らない奴や、正義バカには鬼畜DS

年齢…12歳 暴走時20歳

能力…世界の全生命体の総量を12乗した数が気・魔力・妖力・霊力で神力は”邪神の加護”により得た。神力の総量はエルの10分の1たとえると京たちの次元の神全員をあわせても足りない。

身体能力…通常はラカンと同等程度、剣術は詠春より使えるが詠春が落ち込むのでやっていない。

直死の魔眼…原作どおりの効果、だが副作用なし、完全に理解しているの”見る”ことができれば現象を引き起こすものでさえ殺せる⇒エヴァの呪いなど

天眼…使用時黄色から金色に光る。攻撃の軌道、どれほどの力がこめられているかがわかり、使用中は身体能力が3倍ほどに上がる

見稽古…刀語のアレをチート仕様にしたもの。1度見たものを70%コピー、加護の才能、成長率強化によって1時間訓練すれば120%ほどになる

曲弦師…邪神のミスによって”才能”だけ与えたので戦闘ではまだ使えない

音使い…楽器を演奏するので一般人に使う程度のレベルまではできるようになった

ガンダールブ…よく楽器などをみんなの前で演奏する、その腕前は加護と合わさって神の領域

容姿を好きに変えられる…変えようとがんばったが従者の愛の力によって破壊された。任務のときのみ使用可能

能力を作る能力…戦争に参加するようになってから使うことに躊躇がなくなつてよく使うようになった

能力を作る能力で作られた能力

【武器製造】武器を製造することができる。通常の武器、宝具、魔装器、なんでもござれのチート。しかし扱う本人を超えるものはその力を行使できない。例）アリスの魔力半分を詰めた【闇黒刀】を

エヴァに渡したとしても扱うことができない、ただの刀としか使えない（ただし強度はヤバイ）

【境界を操る程度能力】東方のお姉様から参考にした能力、そのまんまでスキマを作ることができる。仕様用途は移動のみ保存はできない。

戦闘スキル

咸卦法…ガトウより上のレベルで使用可能。

咸卦法・極…神力を除く全ての力を混ぜ合わせた秘奥義。

咸卦法・神…極に神力を混ぜたもの。はっきり言ってチート。エルの20%をギリギリ倒せるレベル

名前…エルティアス

身長…187cm

体重…わからない

一人称…俺 わし 俺様

容姿…ヘルシングの旦那のような容姿、だが内面はものすごく優しい、全身黒服を着るキン・ダム・ハーの黒機関みたいなのが戦闘服
仕様武器は鎌

性格…基本優しいが外見で怖がられることが多い、京に会うまでは

負で覆っていたため周りからは本能で避けられていたが京と在ったことにより負がなくなり子供から好かれたり、普通に恋愛対象になったりするようになった。ブチ切れる要素は、母親、恋人、京夜

年齢…1億あたりから数えていない邪神になったのは2千万歳あたりなのでそれからずっと一人ぼっち、なので京夜を殺そうとするとブチ切れる。ならばエルからと手を出すと京夜がブチ切れるので打っ手なし

名前…フリージア　アリスが前世好きだった花からとった花言葉は「無邪気」「清香」「慈愛」「親愛の情」「期待」「純潔」「あこがれ」

身長…172cm少し背が高いが夜アリスを抱くときにアリスを苛めやすいので気にしていない

体重…「・・・まだ懲りてないのですね・・・？―其は全てを燃やす始原の炎―罪を重ねて犯す愚かな者に聖なる捌きを―全てを灰に！！」
【^{エクス}聖炎の爆風^{ブロード}】「ぎゃあああああああああ！」

一人称…私

容姿…美しい紺色の髪でところどころに赤色のメッシュが入っている、光が当たると神々しく美しさを放つ、陶器のような白い肌と、美しいボディーライン、体の全てが美しい、

性格…（夜のみ）超ドS、通常はノーマル

年齢…20歳ほど（魔法球に入っていたため）

能力…アリスの100分の1程度、神力は仮契約による強化時のみ。
身体能力…アリスより少し優れている。魔法を使ったり殴ったりする
中距離が得意

戦闘スキル

咸卦法…ガトウより一つ下のレベルで使用可能。霊力・妖力がある
が4つの制御ができないので極の行使はできない。

設定集（後書き）

設定が結構増えましたね。

閑話1 名前

「あの！お嬢様！私にいつ名前を付けてくださるのですか？」

「あゝ・・・えっと・・・ごめん忘れてた・・・」

「クスン・・・忘れられてた・・・私の名前・・・お嬢様に忘れられてた・・・」

ああ！ヤバイ！可愛いゲフンゲフン！ヤバイ・・・どうしよう・・・
そうだ！前世好きだった花の名前にしよう！アレなら花言葉もピッタリだ！

「んと・・・じゃあ貴方の名前は今から「フリージア」だよ」

「フリージア？花の名前ですか？」

「そうだよ！花言葉はね？」「無邪気」「清香」「慈愛」「親愛の情」
「期待」「純潔」「あこがれ」
なんだよ？ピッタリじゃない？期待、純潔、いいじゃない！」

「・・・ありがとうございます・・・」

「え”！？イヤだった！？イヤだったら・・・」「イヤじゃないです・・・！とても嬉しいです！」

「そっか・・・よかった」

「あ・・・でも・・・」「うん？」親愛の情が気に入りません・・・

「へ？」

「なんでもありません」

「そう？」

「親愛の情」あながち間違ってもいませんが・・・気にいりませんよ・・・だって私が抱いているのは・・・

——恋心・・・ですから・・・

——そして近い未来に両思いになるのはまだ知らない——

白と白の会談

私は今みんなのところに分身体を残してちよつとした草原に来ている。

そして待ち人はもうすぐくるだろう。

「またせてしまったかな」

「いえいえ、呼びつけたのですから待つのは当然ですよ。コーヒーで言いですか？」

そういつてテーブルとイスを創造する。コレは神力の奇跡なので能力などではない。

「!・・・ああいただくよ・・・というよりコーヒーお願いしますよ。」

「わかりました」

私はそういつて二人分のコーヒーを入れる。実はこのコーヒーはエルから貰ったとてつもなく美味しいコーヒーで、3番目が生まれてきたら飲ませてあげようと思っている一品である。

「さ、どうぞ」

「ズッ・・・美味しいね・・・」

「ありがとうございます」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「それでボクを呼び出した理由は僕の主のことでいいのかい？」

「ええ、ライフメイカーがこんなことを仕出かすとは思えないので」

「そのためには君の力を示してもらわないとね？ 力のないのはただのお節介だよ」

「ふう・・・仕方ないですね・・・」

私はそういつて1番目から離れていった、後ろから呆れたような視線がくる。私が諦めたと思っているようだ。そして私は1番目に向かって

「では、いきますよ？」

体の中で気・魔力・妖力・霊力を神力という繋ぎで混ざり合わせていく・・・

「はああああ・・・フツ！【咸卦法・神】！」

発動した瞬間に自分を中心として力の渦が起こる。そしてそれはすぐに私の中に納まった。

そして発動した私の体は重力など存在しないように軽い。そしてダメ押しで

「これでわかっていただけましたか？」

認知できない速度で後ろに回る。

「っ!?!?・・・ああ・・・わかったよ、だから解いてくれないかな・・・威圧感で死にそうだよ?」

脂汗を流しながら1番目が言ってくる。

それに「わかりました」と返して発動をとめる、だがその瞬間1番目が殴ってきた

パシン! ドゴォ!

「いきなりなにするんですか?」

拳を受け止め【天眼】を発動して20%くらいで殴ったがよく吹っ飛んだ。

そして天眼の発動をとめて

「そろそろ話して下さいますか?」

「ああ・・・十分だよ・・・それにしても手加減してほしかったね・・・」

「びっくりしたもので(ニコ)」

「情報とは違って結構Sだね・・・」

「いえ鬱憤がたまってるだけです。それで、ライフメイカーはどうしたんですか?」

「ふう・・・全部説明するよ、質問はあとでお願いするよ

主と一緒にこの世界を救う策を練ってたんだけどね、いきなり一人の男が現れた、そいつは主を【黒箱】とか言うへんなものに閉じ込めて無理やり主の力を使いだした。そして、今のやっていることをやりだしたのさ。主は悪くないんだよ・・・」

あら？1番目の時点で感情がすっごいあるんですけど？まあそんなこともあるっていったたしなあ・・・
まあ気にしないほうがいいか・・・まあ乱入してきた男ってやっぱり・・・

「転生者かぁ・・・」

「転生者？」

「屑な神共の遊び道具さ、観察されて笑われてることも知らない・・・ね」

「・・・俄かには信じられないね・・・」

「信じなくてもいいさ、ただそういう認識をして対処してくれれば・・・ね」

「・・・わかった何をすればいい」

「旧世界の麻帆良に言って土地の管理者にアリスに言われてきた、かくまってくれて、言って？そしたら匿ってくれるから。」

「そうしたら主が・・・」

「大丈夫・・・能力創造・・・【コピードール】！〔対象、前方の

男性、思考回路、魔力波長、コピー完了。投影開始」

ゴウ！という風が巻き上がったところには1番目そっくりのドールがいた。

「これから君は1番目として潜入してね」

「わかったよ。じゃあボクはいくよ」

そういつてドールは消えた

「・・・大丈夫なのかい？」

「ええ、思考回路も魔力波長も、完璧よちなみにあれば私の分身みたいなもので魂ないから気にしないで」

「・・・チートだね」

「貴方が会いに行くエルティアス・・・【鮮血の死神】のほうがチートよ」

「・・・あの連合の4万もの軍隊を腕の一振りですべて全滅させたって言う逸話をもつ？」

「ああ・・・多分それ逸話じゃない」

「・・・いきたくないね・・・殺されそうだ・・・」

「くす・・・あいつは優しいからな？大丈夫だ」

「口調がいきなり変わったね？まあいいよ、じゃあ・・・主のこと・
・頼んだよ」

「まかされた・・・まったね」

そういつて私は転移した

「まったく、嵐みたいな子だったね・・・さて、旧世界に行かなき
やね・・・麻帆良の【鮮血の死神】か・・・大丈夫かな？」

幻想の一時

私が1番目と会談して帰ってきたらもうアリカ姫達の救出は終わっていた。

「あー少し遅かったかぁ」

「アリスが二人！？どういうことだ!？」

「元々私たちのところに居たのが分身のようですね」

「ちょっと用事があってねーそれで大丈夫だった？」

なにもなければいいけど・・・

「アリカ姫とテオドラ姫が強姦されかかった」

「・・・・・・・・皆を連れて避難しなさいリーザ」

「ビク!」は・・・・はい!!!!皆さん早く避難して!!」

「な・・・・なんだ?どうしたリーザお前が取り乱すなん「いいからはやく!!!!」お・・・・おう・・・・」

「さて・・・・力で強制的になんて・・・・虫唾が走るわ・・・・消して

あげる・・・ふふふ・・・」

「皆さんは私の不完全なルミナスフレアしか見てませんが、今回本物が見れますよ。そしてお嬢様の本気の一端も・・・」

「お？そりゃ楽しみだな！つかなんでいきなりアイツが本気なんか出しやがったんだ？俺とナギが突っかかって片手であしらうようなやつが・・・」

「お嬢様は力で強制的に何かをすることを嫌悪します。あと芯の通ってない正義とかですね。

今回はお二人が強姦されそうになった、というところでしょうね？」

「なんじゃ？アノ娘は？強いのか？」

「テオドラ様あの娘が【紅き翼】最強で一番情に溢れ一番背負う覚悟を持っている少女である【神速の幼女神】アリス・K^{カミギ}ティアスですよ」

「あんな幼女がか！？うう・・・私の憧れが・・・」

「いえ、あの娘は憧れに相当しますよ、剣士の私でさえ持っていない覚悟を持っていますからね」

「ほう、さすがはわが騎士のチームだな」

「さあ？お仕置き時間よ・・・」

——全てを燃やす始原の炎　——全てを照らす神の光　——
不浄の溢れるこの場所に　——不浄を滅する神炎を——　【
ルミナス・フレア
捌きの炎】

ゴオオオオオオオ！そんな音が聞こえそうな白い炎、だけど音は聞こえないただ、ただ、美しく、燃やし尽くす。そしてその場に残ったのは数人の働人と兵士のみだった。

「貴方達は私を害さないようですね・・・貴方達は神炎の加護を受けました、幸があらんことを・・・」

私はそういうと、ナギたちの居るところへと咸卦法を使って飛んでいった

——後にこの事変は【捌きの始まりの日】と呼ばれるようになる。
そしてこの個人的な【捌き】が終わるのはもうすぐ・・・決戦はもう目の前——

「ふう・・・すみません遅れました」

「おかえりなさいませ」

「うん、ただいま」

「「「「「「・・・」」」」」」

「どうしました？」

「ははは・・・我々より少し強いだけだと思ったいたが・・・最強は伊達ではなかったな・・・」

「まあ私は最初からチートだと思っていましたがここまでとは・・・」

「「おい！後で俺と勝負しろ！！」」「「おい！ジャック（ナギ）俺が先だ！」」

「すごいじゃ！綺麗だったのじゃ！もう一回やるのじゃ！」

「うぬ、さっきのは確かに綺麗だった。」

「はあ・・・俺の周りは何故こうもチートばかりなのか・・・」

上から詠春・アル・ナギ+ジャック・テオドラ・アリカ・ガトウの
順番だ

「あはは、もう一回はダメです」

「むゝ！なら他に何か見せてくれ！綺麗なのがいい！」

「丁度夜ですしね、いいですよ」

私がそう返すと

「やった！早く見せてくれゝゝ！」

「お？なんかやんのか？だったら酒用意しろ！」

「はいはい、っと・・・コレくらいでいい？」

「おうよ！」

「あまり飲みすぎるなよゝコレから隠れ家に帰るんだ」

と詠春がいう、まあ3本しか出してないから大丈夫でしょう

「認識阻害・・・っと・・・よし！いくよおゝゝ」

魔力と霊力、そして綺麗見せるために神力をこめる・・・そして発動！

「即席観賞用魔法【スターダストレヴァリエ】！」

パアアアア！！

発動と同時に夜空に七色の光が点滅し始めそれが次第に破裂、広がりまた破裂その破裂時に美しい七色の光を放つ、自分で見てとても神秘的だと思った。

・
・
・
・
・
・
・

「きれいだったのじゃあ……」

「気に入っていただけましたか？ 今度テオドラ様の誕生日などによっても宜しいですよ」

「是非やってほしいのじゃ！ すごく気に入ったぞ！」

「恐悦至極です」

幻想の一時（後書き）

後書き はい！くるみいです。今回はまた東方ネタですね。

【スターダストレヴァリエ】..あまり攻撃に向かない魔法です。これからもちよくちよく演出などで出てくると思います。戦闘では絶対できません。

最終決戦―前編―（前書き）

いよいよ最終決戦です！

そんな15話目です！どうぞ！！

最終決戦―前編―

ああ、いよいよきたね・・・最終決戦。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

「そんなことはどうでもいいさ。向かってくる奴らを落としていけばいいだけだ」

「ちげえーねえー！」

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

「おう。あんたらが外の自動人形や召還魔を抑えてくれりゃ俺たちが本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハッ。それで、あの・・・ナギ殿」

「ん？」

「なんだ？」

「ササ、サインお願いできないでしょうか」

「おあ？ああ、いいぜそれくらい」

「そ、尊敬していました」

「あ！あとアリス様！」

「はい？なんですか？」

「あの・・・抱きしめてもよろしいでしょうか!？」

「え？いや「いいでしょう【アリスお嬢様を愛でる会】1桁ナンバ
ーに免じて許可します!」「え？私の意見・・・むぐ!？」

「あああ・・・アリス様あああ・・・」

「おぬし等・・・決戦なんじゃが？」

「す・・・すみません!!！」

「私悪くないのに・・・」

ん？通信だ。ガトウさんのほうかな？

『連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決戦を遅らせることはできないか?』

そういえばいつの間にかクルトがいたんですよねえ。詠春から神鳴流習ってるっぽいしですし。まあー私としては奥義盗めるからいいんですけどねえ？

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもう始めています・・・「世界を無に帰す儀式」を。世界の鍵「黄昏の姫御子」は今彼等の手にあるのです」

「ああ」

「そうだな」

「よしっ。や「待って、ナギ」ろ・・・んだよ、アリス？」

「最初に大技を使います。露払い代わりですよ。合図をしますのでそれで突入してください。そして外の安全が確保出来次第私もそっちに合流しますので」

「分かった。一発派手に行ってくれよ？」

「もちのろんですよ。皆さん下がってください。リーザ皆さんへの軍への支持お願いします」

「了解しました」

「さていただきますかー！」

「軍の皆さん下がって！合図が来ますのでそれにあわせて最大出力で魔法障壁を！」

「は、はい！全隊に伝令！アリス様の合図とともに最大出力の魔法障壁だ！伝令！——」

うわー結構いるねえ・・・敵軍の上に来るとよくわかるよ、まあこんなことしてる間にも攻撃されてるんだけど、私の魔法障壁舐めないですよ？さて・・・やりますか

「ふうふう・・・ハア！【咸卦法・神】！！」

ゴオッ！私を中心とした周りで力の渦が起こる。

その力の渦が私の中に納まったときに私が動き出す。

「さあ・・・いきますよお・・・ガトウさん直伝【豪殺・居合い拳】！！」

ズドガガガガガガガガ！！！！！！

一発一発を打ち込むごとに25mほどのクレーターができる。それを1秒間80発打ち込む。

本当ならもっと連射できるが、ラスダンがあるので手加減。

ズドガガガガガ！

打ち込むごとに面白いくらいに、舞う、舞う、舞う、散る、散る、散る

そろそろいいかな？

「デッカイのいくよお・・・！私の今考えた即興奥義！【神殺・居合い拳】

ヒュカカカカカカ！！！！チュドドドドド！！！！

一発が【ファイナルスパーク】なことになってる。これダンジョン

大丈夫か・・・？

敵を消滅させたときの余波で暴風が起りますが、事前に魔法障壁を全力で展開するようにさせておいたので、味方に被害はないようですね。

「い・・・今ですナギ！」

「今のが即興奥義ですか・・・？」

「よ、よおし、野郎ども。行くぜっ！！」

なんか周りが呆然としてますね・・・私が一番驚いてますよ？自分がここまで人外になっていたなんて・・・

さて、気合を入れなおして・・・そんなじゃまあ残りの後始末と行きますか！！

Side. end

Side. セラス

私は今、あの【紅き翼】アラルブラに協力して、真の敵【完全なる世界】コスモエンテレケイアとの最終決戦の場にいる。

ナギ殿のサインをもらえて。尚且つ我等がアイドルアリスお嬢様をハグできたのだ！私はかなり舞い上がっているのだろう。いや、というより今死んでも後悔はない！

ナギ殿が敵陣に突入しようとしたときにアリス様が止めに入り、敵陣の上に浮かんでいました。攻撃されていましたが、魔法障壁を張っていたようです。私は見ていてヒヤヒヤしていましたが、次の瞬間にはそんなものは吹っ飛びました。

アリス様が咸卦法（？）を使った瞬間にあふれ出た威圧感・・・私たちに向けられているわけでもないのに息がつまりました。そしてその美しい姿と勇ましい後姿はまさに【戦女神^{バルキリー}】が相応しいでした。

そしてその後ガトウ殿が使う「居合い拳」なるものを使って敵を攻撃しました。

その一発一発が当たるときに20mを軽く超えるクレーターがものすごい速度で打ち出されました。

そしてアリス様が「デッカイのいくよお・・・！」といました。

私は「今のでデカイヤツではなかったのか？」と疑問に思いましたが周りの軍兵や【紅き翼】の面々もそうおもったようです。

そしてアリス様が”即興奥義”を放ちました・・・

そして、暴風が治まったのを確認後、私が見たのは、敵陣に向かっていくアリス様と会長除いた【紅き翼】のメンバーと、総数が2割以下の軍だった

Side end

Sideアリス

ナギたちを見送った後、私は先ほどの技の威力について考えてい

た。

「ああ、これは色々と拙い技を作っちゃったかなあ・・・」

「拙いってレベルの話じゃないと思いますが・・・」

「さ、さて、敵さんも慌てて予備兵力出してきたっぽいし、早く終わらせましょう？ゼクトが心配です。」

「そうですね。お嬢様のご友人を殺させるわけには行きません」

「じゃあ私は掃討しますよ」

「あの、セラスさん。私より前に出るなと通達してください。」

「もとより前にでていません。」

「私は何かしますか？」

「一応障壁張っておいて」

「承知」

「私テイルズシリーズ好きだったんだよね？」

そういつて私は神力を始めて開放した・・・が！予想外のことが・・・まず綺麗な羽衣のようなものをいつの間にか羽織っていた、そして・・・綺麗な12対の羽が・・・もっと出せます・・・まだ3分の1ちょいです。なにこれこわい。

なんか後ろから「美しい」「女神様だ」など色々聞こえるけど聞こえない！今は敵に集中する！

「―――れいめい靈冥へとみちび導くはじや破邪のきら煌めきよ 我わがこえ声にみみ耳をかたむ傾けたまえ
せい聖なるいの祈り 永久とわにつむ紡がれ 光ひかりあれ―――」

―――グランドクロス捌きの聖十字―――

まばゆい十字の閃が敵を滅する・・・そして光が静まったときにはもうそこにはなにもいなかった。

「さ、っさささっ、さて、外はもう危険は少なくなりましたし！リザ！私はこれからナギたちと合流します！。ここは任せましたあ
！！」

「え！？お嬢様あ・・・ってもう居ない・・・」

んじゃ、いつてきまーす。

これ・・・捌きの光柱ジャッチメントが怖くて使えないわ

最終決戦―中編―（前書き）

中編ですゝ連投やでえゝ！妄想がギンギンや！！！！

最終決戦―中編―

「見事・・・理不尽なまでの強さだ・・・」

「黄昏の姫御子は・・・どこだ？消える前に吐け」

私が追いついたときには既にナギと分身との決着はついていたようだ。

「フ・・・フフフ・・・まさか君は、いまだに僕がすべての黒幕だと思っ
っているのかい？」

「なん・・・だと？」

「！？しまった！ゼクトが！！」

「ナギ、気をつけろ！」

「！？」

「ナ・・・ナギイツ！！！！」

「誰だ！？」

「ゼクトオオオオオ！！！！！！！！」

(間に合って!!!!!!!!!!!!!!)

【神器製造】 〔製造完了〕

「守って!! 【アイギス】 !!!!!!!!!!!」

(転生者の攻撃がゼクトに届く前に止めれた!)

ぐっうう……流石に造物主^{ライフメーカー}クラスの魔力は簡単には防げない……。でも……これは見せなくなかったんだけどなあ……

【天眼】 【直死の魔眼】 発動!!

ガキイイイイイイン!!!!

「ぐっ……バカな!？」

「あいつが黒幕か!? よっしゃあ! ぶっとば「ダメよ」は!? なんだよ!

「いいから! ここは……私にやらせて……」

「ダメに決まってるだろう! お前ばかりに任せられるか!」

「わかった……でも私の言うことに従ってね……」

「ああ」

あ……結構やバイかもしれない。
かなり無理な感じに防御したからかな、結構体に負担がかかったっぽいな。

「待てコラてめえっ!!!」

「任せて、ジャック・・・」

ジャックは前の方で防御してたようで両腕が飛んでしまっている。

「い・・・いけませんナギ!その身体では」

詠春はナギを庇ってたからか。かなり傷が酷い。たしかに、ゼクトが防御していたら危なかっただろう。

「アル、お前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ」

「し、しかし。そんな無茶な治癒ではッ」

「30分もてば充分だ」

「ですがッ」

「ふふよかろう。ワシもいくぞナギ。ワシが一番傷も浅い」

「お師匠・・・」

「ゼクト!何をいつているの!?!」

「大丈夫じゃ、無茶はせんよ、それにここで奴を止められなければ世界が無に帰すのじゃ。無理でも行くしかなかろう」

「・・・わかった・・・でも絶対無茶はしないで!友達を失うなん

てことをしたくない・・・
これは命令よ・・・」

「・・・わかった・・・じゃがこの場面だけだと告白みたいじゃの」
「・・・それだけボケれば大丈夫ね・・・」

「ナギ、アリス、ゼクト！待て！奴はマズイ。奴は別物だ。死ぬぞッ。態勢を立て直してだな・・・」

「バーカ。んなコトしてたら間に合わねえよ。らしくねえなジャツク」

「本当、お前らしくないぞ？」

「俺は無敵の【千の呪文の男】サウザンドマスターだぜ？」

「そして私は【戦女神】バルキリーですよ？」

「この二人がいるんじゃない、問題ない！」

「ナギィ！！アリスウ！！ゼクトオ！！！」

最終決戦―後編―（前書き）

いよいよ終戦！はてさてどうなるか！？
そんな感じの17話どうぞ！

最終決戦―後編―

「私が前衛を！。ナギは後衛！、ゼクトは中衛！」

「まかせろ！」

「わかったのじゃ！」

あそこですね！

「先手を打ちます！あわせて！私も貴方達の呪文を使いますから！」

そう言って私達は無詠唱で魔法を使う。

「「『千の雷』！！！」
キーリプル・アストラベ

無詠唱だと威力が落ちるか。でも十分！！！！

「神鳴流・我流奥義！【零閃蓮華】！！！」

キキキキキキキン！！！！！！

「これを受けてまだ立っていられるのですか……」

「この程度で死ぬわけがないだろう！！！」

「そうですね……ライフメイカーの力を自分の使いたいように使えるのだからそれはそれはいいでしょうねえ！！！」

「っ!？貴様!?!?。そうか・・・貴様も同じか!」

「貴方のような暇つぶし要員と同じにしないでください」

「つく・・・まあどうでもいい!始末すればいいことだぁ!」

「あなたじゃあ無理だよ、転生者!」

「おい!。どういうこった!」

「ライフメイカーは悪くないのよ!ライフメイカー自体は人のことを第1に考えている!

こんなことを仕出かさない!自分の命を差し出して枯渴を状態を潤すことをするようなやつよ!」

「だったらこいつは!?」

「こいつが元凶!こいつがライフメイカーを拘束してその力を好きなように使ってるの!」

「だったらこいつをぶっ潰せばいいのか!いくぜ!お師匠!アリス!隙を作ってくれ」

そういった瞬間にゼクトが

「『燃える天空!』!』」
ウーラニア・フロゴース

それに対して転生者が

「『雷の投擲！』」
ヤクラーティオ・フルゴリス

ナイスタイミング！ゼクト！

「その腕・・・もらうよ！」

死の線をなぞって腕を落とす。こいつ死の点が見当たらない。多分消し飛ばさないといけないんだろな。

「まだまだ！【武器創造】【ペシユカド】！！」

武器創造でペシユカドをつくり投げる。腕を切られてあせっている転生者はよけることができずにその体でペシユカドを受け止める。

「――灰にせよ！【黒炎】！！！」

「ぐあ”ア”ア”アアアアアア！?!?」

黒炎の熱で苦しがつている今がチャンスだ・・・！

「ナギイイイイ！！！！ぶっ放せええええええええ！！！！」

「撃つのじゃ！！ナギイイイ！！」

「いくぜえええええつ！！」

「来れ虚空の雷！！薙ぎ払えええええ！！！！【雷の斧くくディオス・テュコスくく】」

ズドガアアアアアアアアアア！！！！

これで終わったのか？だが微量ながら奴の気配が残っている。この方向は！？まさか！？

「ははは！！俺はしなねえ・・・俺は最強だぞ！最強オリ主なんだ！貴様等になんかあ・・・」

ゼクトの身体を乗っ取ったの・・・？！

「く・・・見苦しいわよ！」

「なんとでもいええ！！貴様になにがああ・・・」

（あのゼクトの後ろに見えるのが転生者・・・？）

（死の点が見える・・・！）

「ナギ！足止めを！」

「な・・・お師匠様だぞ！？」「私を信じて！」・・・わかった！！」

「【千の雷<<キーリプル・アストラペー>>】」

ナギが魔法放つと同時に即効発動できる【咸卦法・極】を発動！
最高速度で背後に回りこみ・・・

「ぐおおお・・・くく・・・なかなかハイスペックじゃない・・・か・・・？」

「———死になさい」

死の点を突く

「あ・・・い・・・やだ・・・しにた・・・く・・・」

ドサア！

「ゼクトォ！大丈夫！？ゼクト！？」

「うるさいのじゃ・・・耳が痛い」

「お師匠様・・・よかった・・・」

『助けてくれて有難う』

「「「！？」」」

『はじめまして、私がライフメイカーと呼ばれているものです。』

「・・・いきなりで悪いけど・・・貴方には悪役になってもらうしか道がないわ・・・」

『ええ、最初からそのつもりです』

「おい！どういことだ！」

「そうか・・・連合は”操られていた”という事実が必要なのだ」

「そういうことよ、いきなり膿を出し切ってもそこから菌が入って

壊死していくわ・・・」

「少しずつ直していくしかない、ということかの・・・」

「なんでそんな!」『いいのです。私がもう少し気をつけてればよかったのですから』

「でも見捨てることなんてできないのよね、1番目とも約束したし?」

『っ!?!? あの子が!?!?』

「ええ、とても悔しそうに・・・「あの人は悪くない」ってね・・・」

『そう・・・ですか・・・あの子が・・・』

「と、言うわけで貴方には1番目と暮らしていただきます!」

『え? それは・・・「貴方の答えは聞いてません! 決定事項です!」
【転移陣発動】〔対象前方女性1名・転送先・1番目〕じゃあまたね、【鮮血の死神】によろしく!』

『え! ちょっとまってくだ』ピカー!!!』

「ナギ。満身創痍のゼクトとアスナの回収をしましょう!」

「あ・・・? ああーそうだな!。ところでアリス……。さっきのやつは一体どこに・・・?」

「安心して。私の知り合いのところに送ったから、問題ないよ。それじゃあ、早く行きましょう。アスナがまってる」

「見つけた!!」

ゴゴゴゴゴ!!

「おい!これって!発動しそうなんじゃ!?」

うーん・・・さっきはああいったけどあの老害ウザイのよね・・・
少しくらい削りたいわね・・・
それに私の能力あれば浮遊を続けることもできるようになるし・・・
よし!少し犠牲になってもらいましょう!この二人の未来の子供のためにもね♪

「ナギ、アリカが自分の国を犠牲にしようとしてる」

「なに!?!だったらなおさら・・・」

「それで私その犠牲を払ってもそれ戻せるんだよねー」

「・・・は?」

「老害潰したいから発動させてもいい?」

「・・・・・・・・ハア・・・・もう疲れた、お前に任せる・・・・だけどだ！！ハッピーエンドじゃねえとゆるさねえからな！」

「血塗れた英雄にハッピーエンドはないよ・・・・まあ幸せは私が決めることじゃない、だけど、努力はするよ」

そうして私達はゼクトを背負い、アスナを救出し、最終決戦を制したのだった

最終決戦―後編―（後書き）

決戦終わったああ！！

ちなみに後半の魔法世界編ですが、残りの転生者で構成します！

感想待ってます！批判でもいいので送ってください！

崩壊阻止と嘘

私とナギ、ゼクトの三人は造物主ライフメーカー（仮）を倒すも、間に合わず、「世界を無に帰す儀式」の発動を許してしまう。（わざとだけどね・・）その結果、広域魔力減衰現象が観測された。

しかし、その危機にやってきたのはMM国際戦略艦隊旗艦、帝国軍北方艦隊の協力と、王女のアリカ・アナルキア・エンテオフュシア王女の指示により、集結した全艦隊で「墓守り人の宮殿」を取り囲み、魔導兵団 大規模反転封印術式を起動し世界を救うことに成功した。

オスティアを崩落させるという、多大な犠牲を払うことで。（させる気一切ないけどね）

そして今は帝国とかで楽器演奏をしたり傷の治療をしている。

まあ最初は受け入れられなかったが誠意を込めてやっていたら全員とは言わないが

少しづつ受け入れられていった。

そして場所が代わってみんなのところ。実は終わった後皆に任せて逃げたので詳細を知らない。

まあ大体予想できてるけどね。

「アラルブラ【紅き翼】は全員無事生存ですよ。ですが、詠春の傷が思っていたより深く完治するまで剣は振れないとのことです。アスナ姫のほ

うは元老院に気づかれないところで保護していますよ。それと・・・」

「オスティアは崩落ですか？」

「知っていたのですか」

「大抵のことなら予想してました」

「ん？　そういえば・・・ゼクトはどこに？」

「そこにいるじゃないですか」

あら・・・そんなところにいたんですか・・・っていうか何で一人チェス？

「むう・・・これではアリスを負かすことなど・・・ブツブツ」

「帰ってきてからずっとですよ？　初めての貴方に負けたのが悔しかったんでしょうね。」

「ん・・・？　アリス！　チェスをするぞ！」

「そんなにあせらなくても私たち不老なんだから・・・」

「おや？　あなたも不老なのですか？　まあ・・・予想してましたけど」

失礼な・・・それより・・・「言ってませんでしたっけ？」

「聞いてないぞ！　説明「おいアリス！　いまの本当か！？」」しろ・・・

「空気読まんか！このバカ弟子！「バカだから読めないのよ」

「こいつのことはおいといて俺も気になるんだが？」

「あれ？詠春歩き回って大丈夫なの？」

「歩く程度なら問題ないそうだ・・・で？」

さすがバグキャラ。

「いやぁ・・・もうちょっと待ってほしいな？」

「・・・まあいいじやろう・・・教えてくれる日を待つとするかの、ではチェスをするぞ」

「そんじゃ行こうぜ」

「どこへ？」

そういえばヘンタイ（アルビレオ）はどこに行った？

「俺たちの表彰だよ、表彰」

「アルはどこいったの？」

「逃げたんだろ。どうせ、上がり症なもので。とか言って「まああの男も来て遠くから眺めてると思いますよ、なにせあのロリコンは会員NO.2ですから」

「あいつ、入ってたのか・・・確か【アリスお嬢様を愛でる会】だっけか・・・」

「・・・サッ！ ガシィ！！！逃がしませんお嬢様、「H A・・・H A☆N A☆S E！！」今日はお嬢様の晴れ舞台！全国トップのカメラマンを54人雇い照明係りも賄賂で雇いました。さあ！いきましよう！さあ！さあ！さあ！！」

「お前はそんなことのためでいなかったのかの？」

「そんなこと・・・？」

「お前はそれでいなかったのかの？」

ゼクト、内心マジであせってるだろうな。

「ええ、せっかくの晴れ舞台ですし、【アリスお嬢様を愛でる会】会員3億人突破記念ですよ」

「ちょ！？多すぎない！？！？」

「お嬢様の力です。それに停戦が可決されましたし、その祝いもあってお祭りみたいなものですよ？」

「ふーん・・・ちょうどいいし、あれやるかな」

「何のことだ？」

「まあー後のお楽しみってことで」

「私にまかせなさい！」

「おい！信じてないわけじゃないが、大丈夫なんだろうな！？」

「ええ、やったことの責任はとるわよ？」

「リーザはもしものためにエルに連絡とって」

「了解しました」

さて・・・やりますか！

そしていま上空100mといったところか。ココくらいでいいかな

「ふううう・・・」

決戦の後に実験してわかったんだけど神力を一定以上に高めると人格化状態になるらしい。

あと感情によって白だったり灰だったり黒だったりした。色によって魔法の性質も変わっていた

「【リミッター全解除】」

今回は純粋な神力だけだ。

前の3倍出ると思ったのだがなぜか28対の翼、倍になるわけじゃないんかな？

まあエルに聞けばいいか。

「では・・・いきますよ・・・」

【――大氣たいきに舞まいし精靈せいれいたちよ】

【――我の力の元に具現せよ】

【そして美しき清浄せいじようなる調べしらべを 奏かなでよ】

――スピリットサークル――

【我らわれに聖せいなる加護かごを】

魔術発動と同時に集まる集まる、”中位精靈”、”上位精靈”まで集まってきた・・・ここまではよかったが予想外のことが一つ・・・

「な・・・あれは精霊王!？」・・・そうです精霊王来ました。何故わかったかと言うと周りの精霊を従えているから

「精霊王を従えてるのか・・・？」 「やはり女神様だったか・・・！」
「幼女万歳・・・！」

・・・最後のやつ後で殴る

「っ!？今寒気が!」「大丈夫か?」「大丈夫だ、問題ない」

なんでそのネタしってる。・・・っと精霊王が全部あつま・・・った・・・?

・・・なぜにオリジン・・・? 天地人の源流が何故ココに・・・まあいい!

【私の呼びかけに答えし精霊よこの地に加護を・・・!】

コクリ・・・1回だけオリジンがうなずくと広大な魔方陣が描かれた・・・

「これで下準備OK・・・いくよ!」

この白翼のスピリットサークルは次の呪文の強化補助だ

【神の御名において そのみ使いをここにたまわらんことを欲す】

【我御身の代行者たらんことを願う者なり】

【私の願いを聞き入れ 開^{ひら}け 聖^{せい}界^{かい}の門^{もん}】

———【セフィロト】———

セフィロト・・・これは白翼状態だと設定した一定範囲に神力の加護を受けた魔力で満たす。これは多分私が望んだからだろうね。そしてスピリットサークルの補助強化を使うと、精霊、神力の加護を受けれる上に、セフィロトだけだと大雑把な陣引きが正確にできるのだ。・・・っ!?

やばい、神力が半分持っていかれた。

そして発動した途端に炎精は炎に、水精は水に、それぞれの元素に変わりあらゆるものへの加護を与えてゆく。そして陣が発動。セフィロトによる魔力が噴出。一帯を魔力で包み込んだ。

いくらマジックキャンセラーで作り出した現象でも・・・神の力には勝てないでしょう？

side out

side テオドラ

式典中にいきなりゆれだしたのだがどういことかココが崩壊するらしい！

アリカが独断で犠牲にしたらしいが馬鹿なことを！

そしたらいきなりアリスが「私に任せろ」といつてきた。何をするつもりだと見ておったが

見たものを信じられなかった。素質のあるものしか見ることのできぬ精霊が見えたのだ！

中位精霊、上位精霊ならまだしも精霊王まで出てきおった！本当にアリスはなにものじゃ！？
すると横でゼクトが

「・・・オリ・・・ジン？」

「オリジンとはなんじゃ！？ゼクト！」

「あの中心の精霊のことです。オリジンとは天地人の源流とも言える精霊・・・つまりとっても強くて凄いということです。」

凄くわかりやすい説明じゃのう、なんだかバカにされたような気がするが・・・

「アリスがチートということでもいいのかの？」

「ええ」

その後、次の詠唱を始めた。こんどはなんじゃ・・・？

【セフィロト】

確かに聞こえた、こんなに距離があり、尚且つ叫んでもいないのに
じゃ・・・

それにセフィロト・・・これなら知っておる！確かセフィロトツリ
ーのことで、生命やエネルギーを生み出すもの・・・だったかの？
確かそんなようなものだった気がするのじゃ！

隣を見ると驚くのも疲れて、呆れた視線を送るゼクトがおった、ジ
ヤックやナギも同様じゃ。

確かにあれを見たらあきれるしかないのお・・・

そしてそれから精霊たちが元素に変わってあらゆるものに加護を与
えた辺りから皆が一声もあげなくなった。皆見とれておった。ある
学者はいった、精霊は感情がなく”使う物”だと。間違いじゃな・・・
・力を貸してもらっておるだけではないか・・・それに感情がない
？あんなにアリスの周りを楽しそうに飛び回っているではないか。
その後に精霊たちが作った陣が光だしそこから濃い魔力（？）が噴
出した。　っ！あれがセフィロトか！

ただ光出した陣も加わり、魔力が満ちた空間を悠々と踊る精霊たち
の神秘的なひと時が流れた

S i d e アリス

全てが終わった後に戻っていったら民から「女神様」だのなんなの
でモミクチャにされていた。

途中でリーザに救出され、アリカたちに挨拶して皆と帰った。

だけど挨拶のときに、ナギを見ながら悲しそうにしていた。

まあ理由はわかるけどね。

帰り道でゼクトを除くほかのメンバーから説明しろの視線が痛かつ
た。

あまりに視線が痛かったので「先に帰ってるよ」といってダッシュ
何か言ってきたが無視！突き進む！

ああーこれから先はどうなるかな。

どうやって解決しようかな。と言うかオスティア崩落を防いでもア
リカたちは【コスモエンテレケイア完全なる世界】に繋がっていて父王殺しをしたってこ
とで、処刑されるんじゃないや・・・？

「考えてなかったあああああああああああ！」

バサササササ！鳥が逃げ出す

「いやああ！助けてエルーー！！！！」

「んあ？どした？」

「っ!?!」

【神器製造】で『ガラドボルグ』を製造

「式の太刀【神・雷鳴剣】!!」

ズドギャアアアアアアアア!

「うおわあああああ! あっぶねえな!」

ガラドボルグはエクスカリバーと同じ「雷の激しい一撃」という意味がある。

故に風、雷との相性は抜群だ。・・・というより

「エル!?! なんでここに・・・、しかもいきなり後ろに出てくるから敵かと思ったよ・・・」

「お前が呼んだんだろう!?! リーザが呼んだら来てくださいますかというから、きたんだぞ!」

「あ・・・ごめん・・・」

「まあいい・・・んでどうしたんだ? もう崩壊はとめたみたいだが・・・」

「アフリカ救出考えてませんでした。どうか助けてください!」

ジャンピングDO☆GE☆ZA

「・・・お前バカだろ・・・そこから考えるだろ? 普通」

「・・・返す言葉もございません・・・」

「まあいいや、ほれ、父王の汚職書類、証拠もばっちりだぞ。」

「え”！？本当にあるの！？どんなご都合主義」

「お前が進行しやすいように調べてやったんだ、燃やしていいなら使わせていただきます」

「そうか、うまく使えよ？」

「うん！ありがとねえ〜」

「おう、んじゃ麻帆良でなあ〜」

そういつてエルは消える、転移陣の発光少なくなったね！

「さて、私も隠れ家行こうと・・・」

そして今私の前には怖い顔した【紅き翼】の面々

「えっとね・・・」

「ああ」

「・・・」

「・・・」

「ふう・・・わかったよお・・・」

「まず皆【鮮血の死神】知ってる？」

「誰だ？それ？」

「な！？お前知らないのか！？討伐連合隊の4万の軍隊を腕の一振りで全滅させたっていう冷酷、残虐な男だ！」

「むぷぷ・・・エルかわいそうwww」

「ふふふ・・・すががしいです」

「貴方達がその反応をするということは、そこまで悪人というわけじゃないですね」

「まあ腕一振りは本当だけど、基本向こうが攻撃してこないとやらないね、それに内面優しいし？口悪いけど」

「ツンデレというわけでもないですしね」

「男のツンデレなんかキモイだけだ！」

「今回だけはバカジャックに同意」

「てめえにバカって言われ「黙れお前等」・・・おう」

「それで、あれは？」

「ん、精霊王とかは偶然だよ、あれは精霊を呼ぶだけの魔法だから（多分私精霊に好かれてるから発動したら絶対くるよね。」

「そうなのか・・・ではあの【セフィロト】は？」

「あれは私の魔力の10分の1をギュギュっと凝縮したのだよ、基本私のオリジナル技は神話から似た現象、似た物からとってるから。」

「なるほどな」

「じゃあ次だ！あの翼なんだ！！！」

あーこれどうしよう・・・これ以上は嘘つくのは・・・私のハートが粉々になっちゃう・・・

「それは私が説明いたします「ちょ！？」」「お嬢様では説明し辛いですしょう？」「う・・・うん」

有無を言わせぬ迫力に押された・・・『大丈夫です。エル殿に言われた言い訳をいいますので。』
なら大丈夫かな？エル基本的にミスしないし

「お嬢様は神格者の先祖がえりなのですよ」

「「先祖がえり？」」

・・・こいつら本当にバカだな

「先祖の血が現代に色濃く出ることをいいます」

「「把握したぜ!!」」

「それで？」

「神格者はある一定の力を循環させると翼を具現展開することができ、その対数でその神格者の力量、神格がまります。ですが性質によつては翼が力を貯めやすいなどがあり、その場合5対なのに12対ほどの力を内包しているなどがあります。コレはお嬢様ですね、ちなみにお嬢様は歴代神格者のチートといわれています。」

「・・・そうだったのか、でもそれはかくすようなことなのか？」

「自由に移動し、少し力を込めただけで都市を破壊できるような化物を野に放って置きますか？」

「っ!?!・・・そうか・・・」

「まあそれだけならまだアリスお嬢様のような方なら殺されたりしませんが、不老不死・・・なのですよ、そして人は自分より長く生きるものを嫌悪します。ちなみに、私はお嬢様の家の属家で神格が現れた場合属家の一番優れた乙女を差し出すことになっていましたので、まあ私は永遠にお嬢様を愛でることができるので・・・ふふ」

「まあそのことで権力とか地位とかで強制的に・・・っていうのが嫌いになったの」

読みが凄い、凄いですがエル凄い

「そうだったのか・・・」

「それで質問は？」

「特にないな・・・いやあえて言うならどれくらいのを食らえば死ぬのだ？先祖というからには死んでいるのだろうか？」

「肉体を残さないほどの攻撃」

「・・・むりじゃの」

「H A H A H A ! ! じゃあこのお話はここでおしまいね！後この話は誰にもいわないでね？」

「ふう・・・こんな話誰も信じませんよ・・・」

「同感じゃの・・・」

みんなごめんね・・・

・・・

あとあの崩壊事件から私は【精霊を統べる者（従える者）】と呼ばれるようになった

そしてオスティア崩壊事件から2ヵ月後、アリカ王女は父王殺しと【完全なる世界】と結託し世界の破滅を誘ったことにより【災厄の王女】と呼ばれ2年後に処刑されることとなった。

大戦終了時の設定（前書き）

はい、今回は大戦終了時の設定です。

アリスオリジナルですが、まとまり感がなかったので、今までののは未完成、

決戦前に完成した、という設定にしました。

大戦終了時の設定

名前…アリス・K・ティアス Kは神戯^{カミギ} 暴走時…零崎 狂夜

身長…150cm いくかいかないか 暴走時182cm

体重…「【神力半開放】 【黒翼20対】 【——炎よ 闇の淵より来る全てを食らう邪の炎よ 全てを貫く槍となり 敵を貫け】 【黒炎の死槍】」 ぐおおおおおおおおおおお！

一人称…「私」 暴走時「俺」

容姿…透き通って光が当たると神々しく光り輝く白い髪を持ち陶器のような肌ととても可愛い顔、だが怒ると、暴走状態になり元の京夜の姿に戻る。左目が黄色で右目が青（左目が天眼 右目が直死となっている）

性格…（夜のみ）ドM。そして周りが可愛さのあまりに攻め立てまくるので少し泣き虫になってきている。通常はノーマル、自分が気に入らない奴や、正義バカには鬼畜ドS

年齢…12歳 暴走時20歳

能力…世界の全生命体の総量を12乗した数が気・魔力・妖力・霊力で神力は”邪神の加護”により得た。神力の総量はエルの10分の1たとえると京たちの次元の神全員をあわせても足りないほどで、エルの規格外がよくわかる

身体能力…通常はラカンと同等程度、剣術はもはや神の領域になり、剣だけだったらエルを一方向的に切り刻める

直死の魔眼…原作どおりの効果、だが副作用なし、完全に理解しているの”見る”ことができれば現象を引き起こすものでさえ殺せる

天眼…使用時黄色から金色に光る。攻撃の軌道、どれほどの力がこめられているかがわかり、使用中は身体能力が3倍ほどに上がる

見稽古…刀語のアレをチート仕様にしたもの。1度見たものを70%コピー、加護の才能、成長率強化によって1時間訓練すれば120%ほどになる

曲弦師…邪神のミスによって”才能”だけ与えたので戦闘ではまだ使えない（麻帆良までの準備期間で使えるようになる予定）

音使い…兵士達を操作するときなどに使っていたので最強レベルでなければ防げないほど

ガンダールブ…よく楽器などをみんなの前で演奏する、その腕前は加護と合わさって神の領域。

武器は主に剣とペシユカドしか使わない。

容姿を好きに変えられる…変えようとかんばったが従者の愛の力によって破壊された。任務のときのみ使用可能

能力を作る能力…戦争に参加するようになってから使うことに躊躇がなくなつてよく使うようになった

能力を作る能力で作られた能力

【武器製造】武器を製造することができる。通常の武器、宝具、魔装器、なんでもござれのチート。しかし扱う本人を超えるものはその力を行使できない。例）アリスの魔力半分を詰めた【闇黒刀】をエヴァに渡したとしても扱うことができない、ただの刀としか使えない（ただし強度はやバイ）

【神器製造】神器を創造できる、製造には神力を使うが元々総量が多いため全ての神器を作っても問題ない、だが常備していると世界が変わりやすくなってしまったためアクセサリや宝石などに変えてワードで発動するようにしておく、だが京はメンドクサイので消してまた製造を繰り返している。

【境界を操る程度能力】東方のお姉様から参考にした能力、そのまんなまでスキマを作ることができる。仕様用途は移動のみで、物を中に入れて保存はできない。

戦闘スキル

咸卦法…ガトウより上のレベルで使用可能。

咸卦法・極…神力を除く全ての力を混ぜ合わせた秘奥義。

咸卦法・神…極に神力を混ぜたもの。はっきり言ってチート。エルの20%をギリギリ倒せるレベル

アリスオリジナル 【人に恵みを与える神の炎】 【全てを燃やす始原の炎】 【平等に照らす神の光】 【愚者を滅する裁きの光】 【全てが凍てつく天・（魔）の霊氷】 【この世に豊穡・（災厄）をもたらず平和・（滅び）の風】 【全てを包み込む優しき闇】 【全てを塗

り潰す破滅の闇】で構成され、使用する属性を詠唱する。詠唱は補助・強化は前者、攻撃などは後者を詠唱、その後に言霊・・・【罪を繰り返す愚かな者に捌きを】などを言い、魔法名を言うことで、発動できる。10分間なら唱えた後に溜めておける。その間の戦闘は可能で、新しく唱えた魔法との2連も可能。決戦前に唱えていたもの未完成という設定で、決戦前にちゃんと決めようと作った

テイルズ技…その殆どがアレンジされており、自分に合うように詠唱、技名を変えている。だが実際使ってみると予想外のことが多数あり前途多難、スピリットサークルなど・・・ちなみに【セフィロト】もテイルズでシンフォニア(?)の没技

武器、神器製造で作ったもの

ペシュカド…ペルシャと北部インド固有の短剣で、ペルシャではカルドと呼ばれている。刀身は鏢元あたりの断面はI字型になっており、刀身はS字型に湾曲している。片刃で先端は鋭く尖り、湾曲した刀身は甲冑を突き刺し、自然とえぐる事ができるよう、適した形をしている。柄は重めに作られることが多く、象牙などで装飾されている。切っ先は両刃である場合や、キリのように丸く加工されているものもある。本来は投げられるものではないが、そこはチートボデイ！作るときに能力を付与している。

【黒炎】 …すべてを燃やし尽くす炎に変わる。

【追尾】 …アリスが命令したら追尾する。命中してから黒炎は鉄板、捕まえるだけなら足に当てる

【不治癒】 …その名のとおりでアリスが許可するまで回復できない。

刀…切れ味が良く折れない・・・だけどただそれだけ。

アイギス…翡翠色の障壁を作る。製造時は神力だが行使は魔力ででき、転生者の攻撃を防いだときは魔力に枷を付けていたため壊されそうになった。前方、後方、全方、他者への使用、なんでもできる。だが使用範囲は500mと超人バトルでは少し狭い。

ガラドボルグ…形状は十型で切れ味は抜群、勢いをつけなくても鉄鋼をバターののように切れる。

その伝承とおりに雷、風との相性がいい。そして魔法媒介としてもつかえる。さすが神器

【雷倍増】 その名のとおり雷系統の威力が上がる

【風倍増】 ” 風 ”

【不壊】 絶対に壊れない。壊れるとしても製造のとき異常の神力を加えられたとき、実質エルしかできない。

名前…エルティアス

身長…187cm

体重…わからない

一人称…俺 わし 俺様

容姿…ヘルシングの旦那のような容姿、だが内面はものすごく優しい、全身黒服を着るキン・ダム・ハーの黒機関みたいなのが戦闘服仕様武器は鎌

性格…基本優しいが外見で怖がられることが多い、京に会うまでは負で覆っていたため周りからは本能で避けられていたが京と在ったことにより負がなくなり子供から好かれたり、普通に恋愛対象にな

ったりするようになった。ブチ切れる要素は、母親、恋人、京夜

年齢…1億あたりから数えていない邪神になったのは2千万歳あたりなのでそれからずっと一人ぼっち、なので京夜を殺そうとするとブチ切れる。ならばエルからと手を出すと京夜がブチ切れるので打つ手なし

武器は自分の神力を100年つぎ込んだ【魂喰い】と【神喰い】で神と戦うときだけ【神喰い】を使用する

この頃出番が少ないのでいじけている。・・・おや？誰か着たようだ

名前…フリージア アリスが前世好きだった花からとった

花言葉は「無邪気」「清香」「慈愛」「親愛の情」「期待」「純潔」「あこがれ」

身長…172cm少し背が高いが夜アリスを抱くときにアリスを苛めやすいので気にしていない

一人称…私

容姿…美しい紺色の髪でところどころに赤色のメッシュが入っている、光が当たると神々しく美しさを放つ、陶器のような白い肌と、美しいボディーライン、体の全てが美しい、

性格…（夜のみ）超ドS、通常はノーマル

年齢…20歳ほど（魔法球に入っていたため）

能力…アリスの80分の1程度、神力は仮契約による強化時のみ。
能力が上がっているのは邪神仕様のため限界がない。

身体能力…アリスより少し優れている。魔法を使ったり殴ったりする中距離が得意

戦闘スキル

咸卦法…ガトウより一つ下のレベルで使用可能。霊力・妖力があるが4つの制御ができないので極の行使はできない。

アリス直伝オリジナル魔法。 【全てを燃やす始原の炎】 【平等に（全てを）照らす神の光】 【全てを（が）包む（凍てつく）天・（魔）の霊氷】 【この世に豊穡・（災厄）をもたらす平和・（滅び）の風】 【全てを包み込む優しき闇】 【全てを塗り潰す破滅の闇】で構成され、使用する属性を詠唱する。詠唱は補助・強化は前者、攻撃などは後者を詠唱、その後に言霊・・・【罪を繰り返す愚かな者に捌きを】などを言い、魔法名を言うことで、発動できる。10分間なら唱えた後に溜めておける。その間の戦闘は可能で、新しく唱えた魔法との2連も可能。威力はアリスの10分の1

この頃体重が増え、 【――全てが凍てつく魔の霊氷】 【――罪深き者に死は生温い】 「――ならば与えよう永遠の苦しみを」 【――透氷に生き狂え】

【永苦氷棺】 え！ちょ！？まってくだスキイイイイン！！
アフソリユート

「はい！アリスですココから先は作者が不在なので私がやっていますね！」

「元氣無邪気なお嬢様・・・ふふふ・・・」

名前…転生者

身長…元の姿は185cm

体重…元の姿は48kgという脅威の体重！、本当に皮と骨だけだったんだけど、ご飯はドンブリ3杯食べるという大食っぷり！、おかしいと思い病院にいくが健康体でなんら問題なしだったんだって

一人称…俺

容姿…元の姿は醜・・・醜くて、そのままガリ・・・ガリオタでした

「転生者がかわいそすぎるよ、作者」

性格…自己中心的で、力を貰い自分は選ばれたものだ、その自分に仕えるのが幸せだと本気で思っていた、

「・・・ごめんやっぱりカワイソウじゃないや」

能力…【黒箱】この中に閉じ込めて閉じ込めた相手の力を自由に使える、但し一人のみ

【憑依】同姓の体に入ることができる。そのためライフメイカーに入れず黒箱に閉じ込めた。

後半ライフメイカーを早く出したい作者にめんどくさがられて簡単に殺された哀れな転生者

大戦終了時の設定（後書き）

はい、くるみいです！ここまで呼んでいただきありがとうございます。

ここからアリカ救出、京都へ・・・そして詠春宅と一緒に暮らせようかと。

詠春とはくつつきませんよ！？オールGLです

11／5 18..25 炎の補助呪文が書いてないと教えていただき修正しました。

ナギの気持ち（前書き）

———キングクリムゾン———

そして短い!!

ナギの気持ち

小説本文　アリカが捕まってからもうすぐ2年、もうタイムリミットは2週間を切っている

「もう一週間切ってるっていうのにナギはまだ決心がつかないの？」

私はこの間ずっと戦争の被害にあった場所に赴いて鎮魂歌、傷の治療、食料の配布、孤児の孤児院へ送る、楽器の演奏、復興の手伝い、復興金の寄付、復興金は10万ドル単位で被害状況によっては800万だしたところもある。

何故そんなにお金があるかというと・・・私の能力を思い出していたきたい。とはいっても武器じゃありません。転移符・治療符・治療杖・治療薬など、治療薬は軽症から腕の欠損まで。そして・・・

死の淵から戻すといわれているエリクシールやエリクサーなどを市場価格が変わらない程度に売っていたのでお金はアメリカの国家予算の2倍ほどの個人資産がある。エリクサは魔力回復、魔法媒介にもなるのでエリクシールより高価だった。

「そう言うな。万が一失敗すれば良くて元老院、最悪世界を敵に回すかもしれん。そうなのはアリカ王女を救出しても意味がない」

私の問いかけに詠春が答えてくれるが、世界を敵・・・？今更過ぎて呆れてくる。

いい加減私のイライラも振り切れそうなのでナギに言葉をぶつけるでしょう。

「ナギ！ あなたいつまでなやんでるつもりなのかしら？」

椅子に座りだんまりを決め込んでいるナギに発破をかける。

「・・・アリス・・・俺は・・・」

・・・こいつ・・・戦争中バカみたいに騒いで皆に迷惑掛け捲って
国に喧嘩売ってたりしてたのに・・・いまさら何考えてんのかね・・・
？ 温厚（？） な私でもイライラするんだよ？

「ナギ、あなた・・・アリカを助けたくないの？ ああ、それともア
リカなんかどうでもいいのかしら？ 見捨てるの？」

こんなこといいたくないけど、能力で喋らせるのにコレくらいは必
要なんだよね。

【能力創造】 【言霊行使】

「・・・」

いまです！！（某策士風）

「”気持ちを隠せない”」

はじめて使うからわからないけどこれでいいはず・・・？

「そんなわけねえだろうが！！俺だって”アリカ”を助けたい！見
捨てたくない！だけど腐っても俺は【紅き翼】のリーダーなんだ！
アリカを助けにいけば世界を敵に回す！俺一人の行動で他の奴等に

まで迷惑がかかっちゃう!!」

・・・うん通常なら涙流して「ナギ・・・そんなに私たちことを」とかやるんだろね・・・だけど・・・

「「何を今更言ってるの(んだ) (のじゃ)！バカナギ(馬鹿弟子)！！それは戦争中に言っ(言え) (言ってくれ) (言うのじゃ)！！！！」」」

私達の心の声にナギはキョトンとする

「アリス、貴方結構悪趣味ですね・・・言霊で、強制的に！無理やり！！言わせるなんて」

「ロリコン、その程度ではお嬢様は泣かなくなりましたよ。」

「あっはは！！確かにナギは迷惑かけまくったからな！！」

「「「ジャックもよ(お前もじゃ) (お前もだ)！！！！」」」

それにしてもアルにリーザめ・・・リーザのこと2日無視してやる・・・ああ・・・夜が酷くなりそうだからやめておこう。

それに私は「気持ちを隠せない」って言ったただけだもん！私悪くない！まさかあんな大声で返してくるなんて思ってたけどね。というかよくあそこまで自分を殺せたなあ・・・

「ナギ。もう皆はアリカを助ける気にいるわ。最後のボタンを押すのは貴方よ」

「・・・・・・・・オレはアリカを助きたい。頼む。力を貸してくれ・
・」

そういつて私たちに頭を下げてくる。

「恋が叶わない事ほど辛いことはないですからね、私も手伝いまし
よう「んな!?!?!」

「え・・・まさか隠してたの?」

「ハッ。今更なに照れてんだよ。皆気づいてんぞ!」

「そうですよ。ナギ」

「皆アリカ王女を助けたと思ってここにいるんだ。断るはずがな
いだろ。そして隠してたつもりだったのか?」

「お前ら・・・ありがとう・・・つかココは「俺が好き」なのは関
係ねえだろうが!!」

「んじゃー作戦会議するからこっち集まれ」「おい!!」

作戦会議

——そして今会議中——

「さて、決まったのはいいがどうやって救出する?」

「そうですね・・・下手に手を打てませんからね」

まあ・・・父王の書類あるんだけど・・・少し考えたんだ・・・エル、皆ごめんね、原作どおりでいくよ・・・

「じゃあさ、処刑時にナギ救出!告白!キャーウラヤマシイーてな感じでいいんじゃない?」

「ですがそれだと私たちに火の粉がかかってしまいます」

「じゃあ、生放送でケルベラス渓谷から飛び降りたところをナギが確保。そして告白!キャーウラヤマシイー

そしてイライラをぶつけるために皆で周りの奴等フルボッコ!」

「そうですね、それなら私たちにも疑惑がかかりませんし、アリカ様も死んだことになるので大丈夫ですね。それに全滅のことも新種の魔獣が来たとかデマながせばいいでしょう」

「そうだね、でもそうしたらMMは私たちを英雄に担いで担いで担ぎまくるよね。」

はあ・・・それで芯の通ってない正義バカが大量生産されるのか・・・」

「仕方ないですよ。それに貴方の信念は・・・」

「知らぬ99より知る1を・・・わかってるよ・・・だけどやるせないね」

「そうですね・・・」

と私が終わった後のことを予想して話し合っていると

「けどよ、ケルベラス溪谷って魔法使えないんだろ？どうやって助けるんだ？」

とナギが言い出した

「そこは私のチートで・・・」

【能力創造】！【絶対視の魔眼】そして発動！

「この魔眼があれば・・・ね」

「なんだ？その眼」

「絶対視の魔眼、見ようとすれば全てを見ることができる魔眼よ。
私が”今”作った」

「魔眼を作れるってお前・・・いやお前ならできるか」

「なんか呆れられた・・・」

「見て何かあるのか？」

「私のこの青い眼のほうは直死の魔眼って言ってね、こうやって・・・」

ペシユカドを創造して、線をなぞる。

「発動したときに見える線をなぞるとその物を殺せるの。点も見えてそれをさすと一撃」

「・・・・・・・・・・ははは・・・・もうなにもいわないさ・・・・（遠い目）」

「もうアリスについては驚くのも疲れましたね」

失礼な・・・

「まあセッティングはガトウ、タカミチ、まかせていいかな？」

「ああ、任せておけ」

「はい！」

書類は終わった後にクルトに渡して少しずつ老害を処理してもらおう。

・・・多分恨まれちゃうなあ・・・でも私は自分の選択に後悔しない、絶対に・・・絶対に。

「さてと・・・私も気持ちに答える準備しなきゃね・・・待たせちゃったからなあ・・・指輪でも作ろうか？ふふふ・・・驚く顔が見てみたいな」

作戦会議（後書き）

はい、やっと次回アリカ救出！

思いつきりご都合主義ですね！だがそれが、くるみいくおりていー！

そして最後のセリフが何か皆さんもわかったでしょう。楽しみにしててください。

あとタグにハーレムを付けるの忘れてるという意見をいただきました。た。

完全に忘れてましたので教えていただきありがとうございます！

閑話2 リーザの2年間

私は今、オスティナにある【お嬢様を愛でる会】の総本山にきています。

私がここに来た理由はお嬢様のことを追い回している”蟲”が居ることなのでその情報を取りにきました。

「それで、その不審者の身元はわかりましたか？」

「わかりましたよ会長、元老院の一人、幼女に攻められるSMプレイが大好きな変態爺です。」

「・・・そいつの自宅を教えなさい」

「はい。ここです」

そういうと会員が私に住所の書かれた紙を渡してきた

「それで、会長・・・報酬のほうを・・・」

「ああ、そうでしたね、どうぞ・・・この世に5枚しかないお嬢様の寝顔＋お嬢様の寝起き姿の写真です!!」

「こ・・・これが・・・!!!! アリスさま・・・愛らしいです・・・一度でいいからセラス殿みたいにハグしてみたい・・・」

「それはいくらなんでも許可できません!」

「うう・・・写真だけで我慢します・・・。それに皆アリス様を崇

拝してますからね・・・不敬なマネはできません。アリス様はこういう態度を嫌がると思いますが・・・やっぱり直せませんね」

「お嬢様はご自分を軽く見すぎなのです・・・あの可愛らしく儂げな容姿に加え、あの全てを包み込むような優しき性格、ですが身内に手を出すものは許さない絶対的な信念。コレを一言で表すならば・

」

「お嬢様は「至高・・・ですか？」

「ええ、わかっているようです。そしてそのお嬢様をイヤらしい目でジロジロと見るだけでなく、ストーカー紛いのことをするとは・・・生かして置けませんね。お嬢様の信念が「見知らぬ9より見知る1を」ならば私の信念は「お嬢様に害なすものを滅してお嬢様に永遠に使えること」ですよ」

いやらしい目で見てしまうのは仕方なきことです。私もしてしまつて、しかも襲ってしまったのですから。アレから何回も押し倒してしまっていますしね・・・

「ふふ。情報操作はこちらでやっておきますね」

「まかせました」

ふう・・・さて”蟲”狩りにいきますか・・・

ちなみにこの時【アリスお嬢様を愛でる会】は旧世界にも進出し、

その総人数は7億を超えていた。
そしてこの会の鉄則が【お嬢様の害なることをしない、コレを犯したものは死に値する】というものがある。そして、ナンバーは1~100まで与えられ、リーザのアリスお嬢様への忠誠愛度感知能力による忠誠愛の高いから、1⇒2⇒3 となっている。ナンバーを与えられているものは直接リーザの指示を聞き動く役割を果たしている。

数日後ある一人の元老院議員が惨殺死体で見つかった。恨みのある者と考えて調査が進められたが一步を進展せずそのまま迷宮入りとなった。

別談だが、雇われて、ストーカーをしていたカメラマンや傭兵だが、依頼主が元老院ということと「お嬢様の従者」としての顔もあるの
で、今回”だけ”は不問としたところ「何故許すか」という質問で
「アリスお嬢様は安易には人を殺さないで私もそれにしたがっているだけです」と答えたところカメラマンと傭兵たちが感動し総勢53名が【お嬢様を愛でる会】に入会した。

リーザの2年間はそんな感じであつたとさ

アフリカ救出とダブルプロポーズ

さて、私はいま峡谷の中腹に浮いています。

死の線を切ってみただけだけど30分しか持たないらしいね。まあそれだけあれば問題ない。

ラカン達は上で、ナギはすぐにたすけに行けるように準備している。そして私はいつでも”殺せる”ように準備している

そして上が騒がしくなってきた。そろそろ始まるようだ、ナギに目で合図を送る。

【――魔獣うごめくケルベラス渓谷。魔法を一切使えぬその谷底は魔法使いにとってまさに『死の谷』】

元老院議員の一人がこれから行われる処刑法を説明する。

内容はこの処刑法が如何に残虐かを語り、目的は死刑囚に恐怖を与えることのようなだ。

そしてその説明も終わり、処刑（茶番）の時間がやってきた

「歩け」

「触れるな下郎。言われずとも歩く」

アフリカ王女は一步一步と自らの足で死に向かって着実に歩いて行く。

そして最後に愛する人の名前を――

「さらばじゃ。ナギ・・・そなたを・・・愛していた・・・」

最愛の者の名を口にし、足を踏み出し重力に身をゆだねる。

そして谷底から響く魔獣の咆哮が響き、処刑の完了を知らせる。

「よろし……」

「よおーっし。こんなモンだろ♪」

「そうですね、お嬢様がいないのですから、これ以上撮る価値などありません」

何か指示を出そうとした元老院議員の台詞に兵士の言葉が重なる。

「無礼者！ 何者だ貴様。名を……」

「おっさん」

兵士は元老院議員の頭をガツシリとつかみ、そして告げる。

「録画はここで終わりだ。で、今からここで起こることは『なかった』ことになる。わかるな？」

元老院議員に対しこのような態度を取る者。尚且つこのタイミングで現れる者。

頭を掴まれた議員はすぐにヤツらだとわかったようだ

「貴様らはッ・・・!?!」

「ぬんっ」

と、掛け声と同時に兵士の鎧が弾け飛ぶ。

「【千の刃】の……じゃ、ジャック・ラカンに【断罪の女神】ギロチン マリアのフリージア!?!」

議員の予想は的中した。それも考えうる限り最悪の形で……。

そして処刑場にはまた新たななどよめきが生まれる。

ラカン、フリージアに続き詠春・アルビレオ・ガトウと大戦の英雄が集結したのだから。

「バカなっ!・・・だが! 　いかなサウザンドマスターとはいえあの谷底から生きてh」

「それはどうかな?」

2回に渡りこの議員の台詞はまたしてもラカンに邪魔された

「俺等に足りないやついるだろ?」

「【精霊を従える者】か! 　しかし、同じことだ。どれほどの力をもっていようと、化物であろうと魔法も使えない小娘になにがd」

「ハッハハハ!!!。それがどうしたア!?! 　魔法が使えない?!?そ

んなものアイツにとっては些細な問題なんだよお！」

「そうですね。そしてお嬢様を”小娘”呼ばわりとは・・・殺されたいようだな・・・？」

3回目。どうやらこの議員は最後まで台詞を言えない星の下に生まれてきてしまったようだ。

「ああ・・・アイツが自分でこういえてよ「私は【平等なる死】」だとよ？」

——其れは全てを包み込む優しき闇

「!?!? なん」「そろそろですね。」

これで4回目、そろそろかわいそうになってくる。

——その闇は空を包み静かな夜を映し出す

——【常闇】——

すると突然空が闇に包まれ、夜のような状態になった。誰がどこにいるか、気配でしかわからない。

同時に私が先行し、その後にナギがアリカを乗せて峡谷から飛び出る。だが、魔力の光で闇にポツカリと二人が浮き上がる

「なん・・・だと!?!? なぜ魔法が使えr」

「黙ってろ！」

メキィ！ 5回目にして、ラカンが空気の読まない議員を殴り飛ばした。

『リーザ、ちょっとこちらに来ていただけますか？』

『？はい、わかりました。』

【神力全開放】 【白翼28対】

【スターダストリヴァリエ】！！

七色の光が常闇の空に輝き

七色の光を放ち

破裂し

その破片が七色に輝きながら広がり

また七色の光を放ちながら破裂する。

そしてその中で

「アリカ・・・俺はお前のことが好きだった」

「なっ！？・・・・・・”私”も、だ・・・」

「なあ・・・結婚しようぜ？」

「・・・いいのか？」

「ああ・・・」

「・・・ありがとう・・・」

泣きながらアリカが「ありがとう」という

「俺こそ・・・だな」

あれ？なんかナギが少し大人になった・・・
じゃあ私のほうも・・・

「フリージア」

「はい？なんでしょうk んむ！？・・・ん・・・ふぁ・・・」

こっちによってきたフリージアの唇を少し強引に奪う。私たちは浮いているので背の高さは問題ない。

「ふふ・・・返事待たせてごめんね？私もリーザのことが好きだよ・・・結婚しよう？」

「・・・へ？え？あ・・・はい！」

「はい、これ私の指につけて？」

そうやって【アリスダイヤモンド】の付いた指輪を渡す
そして私の持っている【リーザダイヤモンド】の付いた指輪をリーザの左手の薬指にはめてあげる

その後にリーザが私の左手の薬指に指輪をはめる。

「フリージア、私と一緒に生きてくれる？」

「はい・・・未来永劫・・・貴方と・・・」

「おお！？ナギたちは予想してたが、壊ちゃん達は予想外だぜ！？」

「これは、わしも予想してなかったの・・・よく夜に声は聞こえていたが・・・」

「ああ、あの声は情緒が不安定になるな」

「まあコレでハッピーエンドってか？」

「アリスの受け売りだがの、「戦争の英雄にハッピーエンドはない」だそうじゃ、まあ「幸せを決めるのは自分自身」とも言っておったがの」

「まったく、どっちだっつーの」

「ふむ、それよりこいつはどうする？」

そこにはラカンの一撃によって顎の骨が碎けてダウンしている議員が居た。

「ほっとけ・・・おい！？つかあいつ等俺達おいて帰る気かよ！？」

「追いかけるぞ！ゼクト！ガトウ！いくぞ！」

「ふう・・・仕方ないの・・・」

「はぁ・・・最後はいつもどおりか」

私は隠れ家に帰ってきてからナギとアリカに声をかけられた。

「なあ、俺達にも指輪作ってくれねーか？」

「？いいけど何で私？」

「いや、自分で買ってもいいんだけどよ、やっぱり仲間を選んでもらおうと思ってよ」

「私はいいけどアリカは？」

「私も同じ意見だ」

「あれ？しゃべり方変わった？」

「ああ、ナギと話して普通のしゃべり方を心がけるようにしたんだが・・・変か・・・？」

「いいえ、自然でアリカにあってると思うよ？」

そういうとホッとしたように

「そうか、よかった」

「んで？作ってくれんのか？」

「ええ、いいわよ？親友の頼みだしね、それより宝石はお揃い？それともそれぞれを象徴したような宝石？」

「象徴した宝石で頼む」

「了解、ちよつとまってて」

私はそういうと自分の宝石を作ったときに創造した【物質創造】で宝石を作り出す。

ちなみにどれだけ試しても食料を作ることはできなかった。

トリコのジュエルミートとか食べてみたかったのに・・・orz

ダイヤモンドを原型とした紅色に発光するダイヤモンドと黄色に輝くダイヤモンドを作った。

ダイヤモンドは「征服できない、懐かない」なんていう意味があるからちよつどいいでしょう。

そしてオリハルコンでリングを作る、装飾は私たちと同じでいいよね？

シンプルなリング型に設置台が渦を巻くような形だ。

はい、これで完成。これ簡単にやってるけど神力を神器を作るときより使う。やはり加護をつけているからだろうか？

ちなみにナギたちの宝石には【絆の光】を付与している。宝石の発光がなくなったら、そのとき二人の関係がなくなったということになる。

宝石の名前は【ナギダイヤモンド】に【アリカダイヤモンド】ってところかな。

「宝石の名前は【ナギダイヤモンド】に【アリカダイヤモンド】っ

てところかな？はい、ナギにはこっち、アリカはこっちね」

そういつてナギに黄色のほうを、アリカには紅色の指輪の渡す

「それでその指輪を左手の薬指にはめてあげて？」

「「わかった」」

「じゃああとは二人でどうぞ・・・」

ふふ・・・まあ後は・・・お楽しみください？

さて、私もリーザとイチヤラブしよ〜今まで抑えてたからね・・・
でも受けは私なんだよね・・・
今日は防音障壁必要になるね・・・

アフリカ救出とダブルプロポーズ（後書き）

ははは！！なにい？やりすぎ？きこえんなあ！！！！

【アリスダイヤモンド】無色透明で発光している。ナギ達と同じ【絆の光】を付与している。

【リーザダイヤモンド】澄んだ紺色で、髪と同じようにところどころ赤色のメッシュが入っている。コレも同じく発光している。以下
同文

他にも【全精霊王の加護】【一心同体】などが付与されている

加護はその名のとおり全属性が強化され、精霊がいつもより力を貸してくれる。

これは二人の指輪のみ。

一心同体は、遠くに居る相手がどこら辺に居るのが大体把握でき、近くに行けば行くほど鮮明にわかる。考えなどがわかるのはプライベートに関するものでそこはできないようにした。

ほのぼのな日常

あれから数日経った、アリカは死んだことになったらしい。

そしていきなり詠春が

「お前等、暇なら京都にこないか？」

なにをいきなり

「どうしたの詠春、いきなりそんなこというなんて」

「面白そうじゃな、だが新世界の者がいけるのか？」

「そこはアリスがどうにかできるんじゃないでしょうか？」

ちなみに一番最後のはリーザで私のことをアリスと呼ばせている。
結婚してお嬢様というのはおかしいので名前で呼ばせた。

そして名前を呼び始めてから口調も少し崩れてきてフレンドリーになってきている。

だが、前の棘々しさがなくなったわけじゃないけど。

「んーやってみる」

そういつてラカン、アリカに神力を送る

「あ、できちゃった」

「「「「「.....」」」」」

「さすがアリス・・・」

「あら？ ご褒美にキスでもしてくれるの？」

「くす……してほしいの？」

いままでできなかった分ナギに対抗してずっとイチャついている私たち

[illegible]

「いや……なんでもないよ? うん」

「お前みたいな女好きに婚約者が居たとはな!! 一番最後かと思つてたぜ!!」

「世の中は不思議なものじゃのう」

「タカミチ、これが世界の神秘というものだ」

「な・・・なるほど」

「私的には未来タカミチもそうなる」と予想する」

「え、
！？」

「お前等……俺を何だと思っているんだ!？」

「「「「女好き」」」」

「・・・もういい」

クイクイ

「うん？」

「・・・お腹すいた」

「ああ、もうそんな時間？あすなんがご飯だってさゝ詠春」

「ん？ああ、だったら今日は前にも美味かったし鍋にしようぜ！！」

「あ！それいいね！」

「・・・なあ少し思ったんだが、万能チートなアリスが料理作った
らヤバイくらいうまくなるんじゃないか？」

きた！いつか来ると思っていたよ！この瞬間・・・！

「「「・・・アリス（！！！！）」」」

ナギとラカンとアスナが目を輝かせて聞いてくる、アスナの目に光
！？・・・期待を折るのは心苦しいけど・・・

「あー・・・私ね・・・なぜか料理すると外は黒焦げ、中は生々な
物質ができるんだよ・・・」

「……え？ 万能チートなお前が料理ができない！？」

「新しい発見だ……こんな弱点があつたなんて……」

「
・
・
・
残念」

「じゃがこいつのことじゃ、料理を教えたらまた、超一流が裸で逃げ出すような料理を作れるようになるんじゃないかな」

多分そうだろうね。邪神の加護は伊達じゃないと思うよ。

「それだったら俺の実家に行ったとき習うといい、腕のいい料理人がたくさんいる」

「わかった・・・ああ！！そうだ！！京都ならさ！！詠春！！」

「ん？」

「曲弦師いない！？習いたいんだけど・・・あ・・・やつぱりいな
いるぞ」

[illegible]

「ちよ・・・！わかったから離れろ！！お前の嫁が怖いんだ！！離れろおおおお！！！」

新婚旅行とスクナ復活！

私達【紅き翼】^{アラルブラ}にアリカとアスナを加えたメンバーは京都に来て
いる。

詠春に誘われたから来た、というのもあるけど私とリーザは日本で
過ごすことになるので、日本文化の結晶とも言える京都には前々か
ら来ようと思っていた。

そしてナギとアリカ、私とリーザの新婚旅行も兼ねている、とい
うコレが本命。

「おお・・・ここが旧世界の国か・・・風情があるな」

「そうですねえ・・・新世界とは違う風情です。」

上がアリカで下がリーザ、私以外への硬い言葉は癖のようで、だが
全てというわけではなく柔らかい言葉と硬い言葉が混ざった感じた。
まだ慣れていないのだろう。

「そうだろう？つとここが清水寺だ、ここは飛び降りるやつがよく
いて住民に迷惑を・・・ってお前等なにやってんだ！！！」

このバカ二人は・・・あつ

「ナギ、アリカが少し呆れてるよ？」

「ピク」冗談に決まってるだろ？詠春、アリカ。本当にやるわけね

「だろ」

「お前完全に尻に惹かてんなあ！！！」

そういつて飛び降りようとするジャックを

「アンタは少し自重しなさい」

神鳴流 我流奥義 【零閃・一瞬千撃】

キキキキキキキキキキキン！！甲高い音が連続で鳴り響きジャックを切り刻もうとする。

「うお！？ 【筋肉防御】！！」

すべてあのアホみたいな筋肉で防御される。戦闘なら切れるのに・

・手加減してないよ？

・・・・ネタに関することはバグを超えてチートだね。

「はぁ・・・それより飛び降りたらお酒抜きね」

「じゃあ先いこうぜ」

「てめえは餌付けされてんじゃねえか！」

「んだと！？ やんのかごるあ！！！」

チャキッ 私が刀を構える

「「詠春く先いこうぜ」」

「はあ・・・ええ行きましょう」

そして今呪術協会本山へ向かっている

ナギとアリカはくっ付いてピンク空間を作って皆が呆れて、助けを求めて、

砂糖を吐き出してしまいそうな甘々空間を展開しているこっちを見て顔を引きつる。

「4人とも・・・人目があるんだ・・・もう少し抑えてくれ」

「「「やだ」」」」

ナギ、アリカ、リーザ、私の言葉が重なる

「もうイヤだこいつら・・・」

「別にいいじゃろ、しかし、アリスとリーザは風当たりが強くなるかもしれないの」

「ああ、旧世界はあちらと比べて同性愛については否定的だからな」

「ふう・・・愛があればいいだろうに・・・」

「ガトウが言うとは異常に説得力がありますね・・・っとそこのお嬢さん？私とお茶でも・・・」

「え・・・あの・・・」

「お前はなにをやっとるか!?!」

ガトウがそういつて居合い拳を4発打ち込んでふっとぼし

「すまなかったな」

「あ、いえ。失礼します」

そういつて幼女が歩いていく。

「愛があればいいのでしょうか? でしたら「犯罪は別じゃろ」

はあ・・・本当にアルは・・・

「おーいこの階段上ったところだってさあ」

「よし、ナギ! 競争すつぞ」

「お、いいぜ!」

「んーじゃあ景品はこの芋焼酎で・・・」

そういつたら

「ふう・・・貴様等にはゆずるわけにはいかんの」

「貴方達には譲りません」

「咸卦法はアリなのか?」

「し・・・師匠！？ア・・・アリスさん何故皆さんこんなに・・・」

「ああ、コレね私の神酒なのよ、凄くおいしいのよ？まあ元々は1本2～3万の芋焼酎だけど」

「元々も結構いいですね！？」

「そうかしら？私の資産がアメリカの国家予算の8倍まで膨れ上がってるんだよね？」

「なんですかぁー！！！！」

「リーザが私のぬいぐるみやら、プロマイドやら、売りに出したらしいよ」

「・・・ああ・・・そうですか・・・」

「それで？ルールどうなのじゃ？」

ああ、そうだった

「じゃあ一番先に着いた人が勝手で肉体強化はアリよ、そして妨害は回りに被害がない程度、出した場合は即失格」

「なに！？だったら俺は妨害できねえな、周りふつとぼしちまう」

「俺もだな・・・このルールだとガトウとお師匠様が有利だな」

「じゃあ行くよ？れでい・・・」

皆肉体強化を施す

「ゴーーーーー♪」「ゴファ」

そして皆いっせいにスタートする、そしてリーザが吐血した。うん私も自分でやって恥ずかしかった。

「じゃあ上ろうか」

「はぁ・・・私をおいていくとは・・・ナギのやつめ」

「まあ、いいじゃないですか、口緩んでますよ？」

「むう・・・」

私たちは談笑しながら後を追いかけた

それで、現在私たちは近衛家、つまり関西呪術協会に来ている。
・・・だが・・・

「きゃあああああ！！！！アリスさまがきたあああああああ！！！！」

な・・・なに！？！？

「ああ・・・この巫女達は【アリスを愛でる会】に入っているよ

うですね」

「なんと・・・ってうわあああああ！！！！ちょ・・・ま・・・！！ふあ！！？ちよっとお！！？

なんで巫女服！？ちょ！！リーザ！HELP！ってなんでリーザまで着替えさせてんの！？せめて部屋で！！男の前で脱がすな！！！」

ちなみに勝者はガトウ、最後にゼクトを踏みつけてゴールしたそう
だ。

「むう・・・！わしを踏み台にするとは・・・」

「いいところに居たお前が悪い」

「・・・・・・・・なんかガトウ黒くなってる」

「誰のせいだと思う？」

「・・・・・・・・さあ？」

多分私かりーザかな

「うう・・・私はもうお嫁に行けない・・・」

「もうきているじゃないですか」

まあそうだけどね？

そして、詠春の帰還と【紅き翼^{アラルブラ}】の来訪で大宴会が行われた。最

初はまあ賑やかと言って差し障りのない感じだったんだけどね・・・？、気付いたらどんちゃん騒ぎ・・・ガトウに渡した神酒が3分の1あたりになったときに取り合い発生。仕方ないので10本くらい作って皆に見せると、

皆戦争中異常の速度でその神酒を取りに来た。

そんな時だ。何かを知らせにきた巫女が言葉を出す前に、咆哮が響き渡った。

「詠春。まさかとは思うけど、この咆哮って・・・りょめんすくなのかみデスカ？？」

嫌な予感がヒシヒシビリビリウヘウヘするんだけど

「恐らく、アレで間違いないかと・・・」

「うげえー、よりもよって新婚旅行で・・・」

「すみません・・・手伝ってくださいませんか？」

「リョウメンスクナ両面宿儺か・・・一回あってみたかったんだけどね？じゃあ私一人でいつてくるよ」

「は？いやいや！？一応神ですよ！？」

「たかが両面宿儺だよ？神格者に勝てるっても？」

「・・・それもそうですね、封印は元々の封印方法でお願いしますね。」

はいはい、了解了解

でことで、私は一人で先に行ってきますかねー終わったらリーザとイチヤイチヤしようっと

そしてスクナのところに来ました・・・だけど

「封印解除が中途半端って・・・出てきたの外枠だけじゃん・・・中身スツカラカンの空っぽじゃない」

そう、中身が空っぽで話も何もないのだ。封印を完全に外そうと思

ったけどもリーザとのイチャラブタイムが消費されるのでやめた

「じゃあ封印するかね？ 【ペシユカド】！能力発動！ 【黒炎】 【不治癒】」

ペシユカドを創造、黒炎と不治癒を発動してスクナに投げつける。
そして【能力創造】で【巻き戻し】を創造し スクナを対象に封印を巻き戻す

ペシユカドにやられて弱っているスクナは抵抗できることなく封印される

「ふう・・・さて、早く戻って宴会でもしようかな」

「ただいま・・・って何で皆武装してんの？」

「アリス！ いや、本山がスクナを一人でどうにかできるわけないと・・・俺達はアリス一人で十分だといったんだがな？ それでスクナはどうした」

「ん、3行で説明するなら・・・」

中身空っぽだった

話したいけど面倒だから封印

帰ってきて説明 ↑いまここ

かな？」

「なぜ3行にしたのかよくわからんが封印したなら問題ない」

「一応確認のため陰陽師に封印の確認に向かわせろ！補強できるようなら補強しておくように！！」

「「ハッ！」」

それじゃあ宴会に行こう」

「・・・でどうしてこうなった？」

簡単に状況を説明するとタカミチと私と詠春以外全滅。

そして詠春もナギとラカンとアリカに捕まり飲まされている。

「貴方が神酒を大量に出したからですよ。アリカ様が飲んで酔っ払い、リーザ様に飲ませてました。

他の人たちはいつものことですね。」

「まあ・・・ゼクトも神酒にゾツコンだからねえ・・・っと」

「はう・・・ありしゅ」

・・・ゑ？だれ？

「うにゅ・・・なんでかってにすくなのところにいったのゝ#」

まずい・・・リーザに言ってなかった・・・てか絡み酒か！？・・・いや、普通の時もコレくらいするか？だけどいつも以上に怒りそうだなあ・・・よし

「リーザに危険を加えそうだったから」

これで大丈夫か・・・！?!?!

「ふえ・・・？えへへゝそんなにしんぱいしてくたんらー・・・」

・・・ヤバイかわいすぎる。あの綺麗なリーザがふにゃ笑いをするなんて死ぬ、ギャップ差で萌え死ぬ。タカミチも赤くなってるし。だがまあ、リーザは綺麗すぎるのでそこまで怒る気もしない。そして、私がもう我慢できない、ということ

「あの、巫女さん。部屋どこですか？」

「ふにゅ？もうねるのお？」

「ええ・・・”一緒に寝ましょう”？」

「うん」

「こちらでございます」

ちなみに巫女さんたちは私たちが結婚していると知っている。
知ったときはウラヤマシイなど叫んでいたが今では普通に接してくれている。

そして部屋に着いた。

「では」

” お楽しみくださいませ”

あらら、気づいてたか。

「ふふ・・・防音張るから聞こえないよ？」

「・・・残念です・・・」

私、師匠になる。(前書き)

タカミチ強化です！なぜならば好きだから！！

私、師匠になる。

あれから、酔っ払いのリーザとやったのだが、リーザが酔っ払いブレーキが利かなく、危うく私が壊れるところだった（精神的に）そしてラカンとゼクト以外酷い2日酔いでダウン。まあ詠春はそれだけじゃなかったみたいだけどねえ？朝起きてきたときに「昨夜はお楽しみだったようで」といったら異常なほど反応していた。

「はあゝ・・・・」

あら？ずいぶんと落ち込んでるね

「ん？タカミチどうしたの？？」

「あ、アリスさん・・・ガトウさんが今日修行してくれるって言ってたんですけど・・・」

「ああ・・・ごめん」

それって私のせいだね・・・ごめん本気で

「いえ・・・はあ・・・咸卦法も一応教えてもらうんだっただけですけど・・・」

「ん？もしかして居合い拳習ってるの？」

「あ、はい」

「もしよかったら私が見てあげるよ？」

「本当ですか！？お願いします！」

「おkおk、じゃあ広場いこうか？」

「はい！！！」

そして広場に到着。修行の前に説明しないとね

「それじゃあ修行の前に試験したいんだけど。タカミチ貴方は魔法が使えないんだったわね？」「はい」

そのことで皆より一歩遅れてるなんて思っていない？」

「・・・違うんですか？」

「ええ、私から言わせて見れば、”一つのことだけをひたすら見て、極めることができる”そう思っているわ」

「一つのことを・・・極める・・・」

「ええ、中途半端に切り札を持っていたても意味はないのよ？色々な組み合わせができる・・・私みたいな感じじゃないとね」

「・・・・・・・・」

「そして貴方の切り札は居合い拳、咸卦法、ならばその二つを極限まで極めなさい。どんな切り札にも負けない、そんな切り札にしないさ」

「・・・はい！」

「そしてこれが試験」

「なんですか？」

「私が師匠になったとして、アナタは

”私を何として存在させるの？”

「え・・・・・・・・」

さてと・・・これが試験よ？

「…………アリスさん……が師匠になったとしたら……アリスさんは……”師匠”は僕が超えたいと願う壁です！僕が超えなければいけない壁です！！」

「ふ・合格！はじめるわよ！」

「はい！」

「さっきも言ったとおり、あなたは自分の切り札を極めるべき、そこでよ。毎日、いえ時間があるときでかまわない。ひたすら居合い拳を撃ち続けなさい。そのものに才能がないなら努力すればいい。ひたすら、ひたすら、その一発を重く、鋭く、何よりも強い一撃に、自分だけの一撃を完成させなさい。」

「わかりました！」

「じゃあまず1万発ね、ひたすら打ち続けることに体を慣れさせなさい」

「え”…………わかりました…………」

ヒュン！ヒュン！ヒュン！ ふむ……やっぱりまだ音を叩くほどじゃないか。

パァン！パァン！パァン！8000回を超えた辺りから音を叩くようになってきた。

さつき才能がないとかいったけど・・・才能あるかもね。コレならもう咸卦法もやらせてみようか。

「い・・・ち万！」

ぱぁん！

「はぁ・・・はぁ・・・」

「どうだった？」

「途中から自分の拳の威力が鋭く、重くなっていったのがわかりました」

「そう、その感覚を忘れずに撃ち続けなさい」

「はい・・・！」

「そろそろご飯だからいきましょうか。食べ終わったら咸卦法の練習するわよ」

「え！？もうですか！？」

「え？ガトウにおしえてもらうんじゃないの？それにもうそのレベルまで至ってるわ。それに隠れて居合い拳と咸卦法の練習してたんでしょ？」

「え・・・は、はい」

「だったら問題ないわ〜じゃあいきましょう〜」

「はい！」

ちなみにリーザはアリカの看病をしていた。

「あれ？皆は？」

「皆様は二日酔いなので部屋でお粥を食べております」

「あらら、おっ純和風！おいしそう〜」

「本当ですね〜詠春さんがよく作ってくれたましたけど、とてもおいしかったですから。楽しみですね」

「お、アリスとタカミチか、それでは食べよう」

「あれ、詠春、ダウンしてたんじゃない？」

「いや、二日酔いのほうはそこまででもなかったんだ」

「昨夜はお楽「言わせるか！」むー」

「まあそんなことは置いておいて・・・」

「「いただきます!!」」

ちなみにご飯は 味噌汁、秋刀魚の塩焼き、ほうれん草の胡麻和え
だった。とてもおいしかったです。

そしてまた広場、

「よし、じゃあまず一回咸卦法やってみて」

「え!?! いきなりですか!?!」

「いいからいいから」

我流でどのくらいいったのか知りたいしね

「左手に魔力、右手に気・・・合成!」

ブオオオオ! お!?! 本当に後一步じゃない!

「まただめでした・・・」

「いやいやいやいや・・・あとちょっとだよ!?!」

「そうなんですか!?!」

「ええ、私が詳細を教えてあげるからもう一回貯めてみなさい。」

「はい! 左手に魔力、右手に気・・・」

「あーちょっと気がゆれてるゝよし、あと魔力ちょっと少なく、そう! その状態! その状態を20分!」

「はい!」

「OK！合成してみて」

「合成！！」

ゴウー！！よし、できたみたいだねえ、だけど30%ってところか、

「うん、できたねだけどそれでも30%ってところ、咸卦法も毎日居合い拳を1万発くらい打ったあとに、咸卦法状態で居合い拳を打ち続けるをやりなさい」

「うえ・・・はい・・・」

「じゃあ今日はこれくらいかな？疲れたでしょう」

「はい・・・ありがとうございました」

「はいはい」

タカミチはいい子だからね、原作みたいに紅き翼に異常に心酔しないようにしなきゃ！

これからと、私の家

あれから数日が経った、その間夜リーザとイチャラブしたり、タカミチの稽古したりと色々やっていた。そして詠春がいきなりこんなことをいいだした。

「みんな、これからどうするんだ？」

「んあ？いきなりどうしたんだ？まあ俺は新世界で拳闘士だな！」

「俺はアリカを連れて世界を見せに回るぜ」

「わしは新世界を放浪かの」

「私も同じですね」

「そうか。アリスとリーザはどうするんだ？」

「日本に居るのは決定かな、それで京都に住もうかなーとか思ってる。まあタカミチを入学させるのと数年後に麻帆良にお世話になるからその挨拶には行こうと思ってるよ」

「え！？師匠！？え？ちょ！ま・・・」「一応平和になったんだし、どんだけ頭よくても歳相応の事をしなさい。それに私が日本にいらんだから日本に居なきゃいけないでしょ？大丈夫、私も1ヶ月1回くらいは様子見に行くから」

「ふむ、なら麻帆良でのタカミチの世話は私がやろう」

「・・・もういいです」

え・・・？ガトウの死亡イベントが消えた・・・！？私が介入したからかな・・・まあここは流れにのって・・・

「じゃあ、ガトウお願いできる？」

「まかせろ」

クイクイツ

「・・・私も」

「え？ああ、アスナも？そうねえ・・・でもまだ薬の影響でまだ成長するようになってないしねえ・・・ガトウどうする？」

「まあ、いいだろう、勉強は必要だろうしな。それに・・・この二人、随分とお互いのことを気に入ってるようだしな」

「・・・／／／／」

「な！ガトウさん！いきなりなにを！！／／／／」

「へーーーー・・・そうなんだあ・・・（ニヤニヤ」

「おやおや」

「青春じゃのう」

「でも、アスナは少し時間が必要かなあ？多分中学校の時にはタカ

ミチは大人かなあ？」

「・・・どうして？」

「人間っていうのはね、ほんの一部以外自分達とは違うものにはどこまでも冷酷になれる生き物なんだよ。」

「・・・」

「まあ、タカミチと一緒にには居れるよ？」

「・・・うん／＼／」

「アスナとタカミチはガトウの保護下で麻帆良か・・・わかった、あとアリス、京都に住むなら本山の土地に使っていない土地があるからそこを提供しよう」

「お、本当？　だったら京都に住むことにするようありがとうね詠春」

それから数日、ガトウ、アスナ、タカミチ、私たち以外はそれぞれ旅立っていった。

そして今空き地に来ている。

家を建てるのに必要な木材などは私が頼んで運んでおいて貰った。

「おゝここが空き地かあゝ広いし紅葉綺麗だし、いい場所だねえ」

「そうですね、空もよく見えますから月見酒などもできますね」

「気に入ってもらえて何よりだ、それでどんな家にするんだ？」

「こういう家だよ」

私はそういうと風で陣を描いて、ハガ鍊の【鍊金術】を使って家を製造。

「・・・この頃おとなしいからお前がチートだって忘れてたよ」

「さすがアリスです」

「ありがと・・・？」

「ああ、そういえばお前が言っていた曲弦師の話だが」

お！どうなったんかねえ？

「呼んでおいたぞ。明日の13時頃に家に来い」

おお！！さすが詠春仕事が速い！！

「お！本当？ありがとう！それでその流派の名前は？」

――
鳳凰流だ
――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1285y/>

邪神の加護を受けし物

2011年11月5日21時59分発行